

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

S.ジャランアージャブ：遠ざけられた側近

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00001402

S. ジャランアージュ ——遠ざけられた側近

解説

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 わが生まれし故郷 | 6 検事総長に就任 |
| 2 石灰工場の労働者 | 7 法の策定 |
| 3 党・国家中央学校への入学 | 8 テレビ局の開設 |
| 4 母校の教壇に立つ | 9 政治家として |
| 5 法律研究への道 | 10 ツェデンバルの思い出 |
| | 11 冤罪 |

解説

S. ジャランアージュ氏は、B. ニャンボー氏のインタビューにも登場するように、Ts. ローホーズの一派、しかも首謀者の1人として批判された。このとき、B. ニャンボー氏は内務省との約束をたがえてまでY. ツェデンバルに抗議の手紙を書かなければならなかった。なぜなら、すでに追放されていた彼らとS. ジャランアージュ氏とはまったく関係がないどころか、むしろ彼らにしてみれば一緒にされたくないほどS. ジャランアージュ氏はY. ツェデンバルの側近中の側近だったからである。

S. ジャランアージュ氏は定年を名目的な理由として解任され、さらに反党グループの首謀者として地方へ追放され、またその著作は発行禁止となって回収された。その理由は、Y. ツェデンバル書記長のロシア人妻であるフィラトワとの確執にある。Y. ツェデンバル夫人フィラトワは、モンゴルが教育、文化、芸術の方面で近代化を果たす過程で、なかんずく子どもに関する方面で、偉大な指導者として位置づけられていた。しかし、その差配は決して文化政策に限定されず、多くの人事に口をはさむようになっていたと言われている。S. ジャランアージュ氏の証言は、Y. ツェデンバルの政治生命がどのようなものであったかをロシア人妻の面から考えるうえで非常に重要である。

彼はすでに『乗り越えてきた道で生まれた思い』(2004)を著し、法学者としての考えをまとめている。2005年6月11日に行ったインタビューでも、勢い、モンゴルにおける法律の歴史に関する解説にしばしの時間が割かれた。それこそは彼が本来、得意とする領域であり、言い換えれば、法律に関する研究教育者として自己表出されているのであろう。どれほど学問の世界にのみ身を投じようとしても、いやおうなく政界に吸引されてしまうという社会主義時代の知識人の運命について、その一例をまたここにも見出すことができる。すなわち、社会主義時代の政治闘争はつねに官学一体のものであったのである。

文 献

Jalan – Aajav, S.

2004 “Tuulsun zamdaa törsön bodol” Ulaanbaatar. (モンゴル語『乗り越えてきた道で生まれた思い』)

S J : サンピリーン・ジャランアージャブ

I L : イチンホルローギーン・ルハグワスレン

K Y : 小長谷有紀

1 わが生まれし故郷

K Y : さて、本日は、モンゴル人民革命党中央委員会政治局員、書記、人民大会議幹部会副議長などの要職を歴任されたサンピリーン・ジャランアージャブさんとお会いでき、たいへんうれしく思っております。モンゴル国にとって新時代の歴史が始まった時期に、あなたはお生まれになりました。この国とあなたとは同年代ですね。

S J : そうですね。そう言っていていいでしょう。

K Y : 今日のインタビューをあなたの子ども時代の思い出から始めてはいかがでしょうか？お生まれの年や場所、ご両親やごきょうだいについてお話しいただけますか？

S J : わかりました。今日のこのインタビューを子ども時代の思い出話から始めましょう。

私はハンタイシルオール・アイマグのオトゴンハイルハンオール旗、つまり、現在のザブハン県アルダルハーン郡の地に、1923年に生まれた人間です。私が生まれたのは、わが家がボグド川の岸边にあるヘレムティーン・アムという場所で冬営中のことだったそうです。当時は、近代的な病院がなく、どの子も自宅で生まれていましたし、現在のような〔出生〕登録はしていませんでした。私もそんなふうにして生まれたのでしょうか。

生まれ故郷のザブハン県はモンゴル西部、ウランバートルから1,150キロの距離にあり、ハンガイとゴビの両方をあわせもち、河川や森林の豊かな地方です。1990年以前にはモンゴル国には18の県がありました。1992年に行政区画が変更されて21県になりました。1921年の人民革命以前には、アイマグが4、シャビ領が5、旗が70余りありました。1921年以降、モンゴル国は何度も行政区画の変更をしたのですよ。今ふたび行政区画を変更するらしいですね。いつ、どのように行うかはっきりしていませんが、政治の世界ではこの問題について議論が始まっています。

私の生まれたアルダルハーン郡には、モンゴル第2の高山であるオトゴンテンゲル・ボグド・オチルワニ・ハイルハン山があります。高さは海拔4,300メートル余りなので、

頂上には冬でも夏でも常に万年雪を頂いています。この山は、われわれモンゴル人が最も縁起の良いものとし、仰ぎ、崇拝している大霊山の1つです。ここではオトゴンテンゲル山の祭祀が毎年催されます。この祭祀には、モンゴルの全県から人びとが集まります。オトゴンテンゲル山の周囲は、芳香を放つアルツ〔ビャクシンの一種〕で覆われておりましてね。麓にはフフ・ノール、ツァガン・ノールという2つの美しい湖があります。また、名高い「オトゴンテンゲルの鉱泉」というすばらしい鉱泉もあります。人の健康に極めて良いこの鉱泉を、西部各県の人びとはみな飲んだり、浴びたりして用いています。ここには多種多様な病気を癒すことのできる各種の鉱泉があります。私たちが子どもの時分には、誰がいつ作ったかわかりませんが、「目の泉」「足、手、関節の泉」などとモンゴル語で書かれ、英語訳が添えられた古い表示がありました。この表示をつくったのは、英語に詳しい、学のある人だったかもしれません。

誰にでも大切なものはたくさんあるでしょうが、生まれ故郷や産みの母ほど愛しいものがあるでしょうか？モンゴルのすばらしい国のことを、わが国の偉大な作家D.ナツァグドルジは心の底から、みごとに讃えて謳いました。ナツァグドルジの詩「わが故郷」はモンゴルの土地をモンゴル語で謳いあげた傑作です。われわれの祖先は、かくもすばらしい祖国、かくも美しい言葉と文化を私たちに残してくれたのですよ。われわれモンゴル人は、代々このすばらしい土地に暮らしてこんにちを迎えました。私はそんな土地に生まれた人間です。このことを誇りに思い、喜ばしく思っている者です。

母の父親、つまり私の祖父は「スレン・トイン」という名のタイジでした。チンギス・ハーンの「黄金の一族」の高貴な血筋の人間をタイジと言うでしょう。しかし、祖父は「随丁をもたないタイジ」でした。スレン・トインの娘ダシツェベグが私の母親です。母から生まれた4人きょうだいの一番上が私でした。私は15歳まで、祖父と母の庇護のもと、故郷で育ちました。祖父の家は、馬100頭余りと牛20〜30頭、羊200〜300頭があり、中程度の財産を持つ家庭でした。わが家は、夏にはハンガイで夏営し、冬にはゴビへ移動して冬営していました。そのような移動の際には片道約300キロの道のりをたどったものです。

KY：いつ、どこで小学校に入学なさいましたか？

SJ：私は小学校や中学校にはまるで通ったことのない人間なのです。私の幼い時分、モンゴル人は、モンゴルで5種の家畜を飼い、その恩恵で衣食をまかない、何の不足もなく平穏に、幸せに暮らしていたと思っています。地元には、生活の点で裕福でない個人や家族はいましたが、物乞いや、住む家のない浮浪者は1人もいませんでした。

私たちはそんな暮らしがあることもまるで知りませんでした。家畜がたくさんいる満足な暮らしの家庭は、家畜の少ない乏しい暮らしの家庭や個人を見下すことなく、むしろ深く結びついて助け合い、親しい関係を持つよう努めていたものです。モンゴル人は

はるか昔から「サーハルト・アイル」「ホト・アイル」という形で互いに近しく、相互に助け合い、力を合わせて仕事をしたわけですが、このことは、社会的、経済的、政治的に非常に大きな意義をもつ、独特のシステムだったと思います。私の子ども時代、地元には盗みや強盗をはたらいたり、他人を騙したり、酒びたりになったり、乱暴をはたらいたり、他人の自由を侵したり、人の命や健康を傷つける、あるいは何かの犯罪的な攻撃をするといったふるまいは1つありませんでしたし、そんなふるまいの話を耳にしたこともありませんでした。誰もがお互いをきょうだいとして友好的に扱い、お互いを敬愛し、穏やかに暮らしていたものです。

当時、私の故郷には、寺院がかなりたくさんありました。1921年の人民革命が勝利した時、モンゴルには寺院が合わせて700余りあり、僧侶は10万人余りいたという数字があります。それらの多くがわがザブハン県にありました。モンゴルには5～6人の著名な「ホトクト」や「ホビルガーン」がいましたが、その大半がわがザブハン県の出身でした。「ホトクト」「ホビルガーン」というのは仏教の高い位ですよ。モンゴルの著名なホトクトの1人であるダンザンラブジャーは半乾燥砂漠で暮らしていました。「ゴビのノヨン・ホトクト」という名前でモンゴル中に知られていました。ダンザンラブジャーは歴史家、作家、詩人、そして劇作家でもありました。

当時、私たちは飼料用の草刈りをしていませんでした。大雪が降った時には雪の少ない場所へ移動します。モンゴル遊牧民の特徴の1つはこれなのです。大雪が降り、家畜のえさとなる草がなくなって来ると、雪の少ない、家畜のえさとなる草の豊かな土地へ移動するのです。モンゴルの牧民は、降雪や嵐について、現在の気象専門家よりよくわかっていたと言えます。牧民たちは、寒くなる時期を予知し、移動を調整するのです。家畜を元気に年越しさせるためなら、移動をさぼって延期するという観念はまったくありません。

祖父スレン・トインは地元で有名な優れた牧民で、生来の聡明さがあり、極めて勤勉で、人柄も良く、思いやりのある人でした。祖父は、家族や近所の人びとの支えとなり、常に力になっていたために、人びとから敬愛を受けている、人徳のある老人でした。

祖父は毎日家畜の番に出かけていたので、地元の家々の家畜が放牧されている場所、肥え具合、人里離れた放牧地のどこにどんな家畜が、番人なしでいるか、あるいは地域の草地や水場、天候の変化について非常に幅広い情報と知識を備えた人でした。ですから、祖父に、いなくなった家畜のことを問い合わせたり、地域の草地や水場の状態、天候について尋ねたり、地域で起きているできごとについて意見を交換したりするために、大勢の人がわが家に集まったものでした。私は家畜の世話の方法を祖父から教わり、年齢相応の仕事をそれなりにこなせるようになったのでした。

当時、地元には文字のわかる人はごくわずかでした。祖父は娘、つまり私の母が幼いころ、モンゴル文字を知っている人に弟子入りさせました。母はこうしてモンゴル文字

を学び、読み書きと四則計算ができるようになったのです。1922年、ハンタイシルオール県が新設されると、母は県庁で清書係の仕事につきました。母は自ら私にモンゴル文字を教えてくださいました。それに、加減乗除の四則計算も教えてくださいました。こうして母からモンゴル文字と四則計算を教わったことが、私にとってその後の学問の道の始まりとなりました。

そのころ、私たちのアルダルハーン郡の、ヤロー川とチゲステイ川の流域にあるフフ・ホショーというところに、最初の小学校が設立され、そこには、D.チメド先生という、みんなから尊敬される若い女性が勤めていました。地元の人びとに「とんがり黒」というあだ名で呼ばれた革靴を履き、ショートカットで、まるくて白い帽子を少し斜めにかぶった先生の姿はたいそう目に立ち、垢抜けて見えたものです。チメド先生は人民の子どもたちの教育への取り組みに着手し、私たちの地方に近代的な文化と教育の基礎を築いてくれた、不朽の功績ある人物です。

その小学校の近くの、1部屋しかない小さな白い建物で、ロドンという准医師が科学的医療の提供を始めました。私たちの地方で最初のこの診療所は「ロドンの白い家」として人びとのあいだで評判でした。そのほぼすぐ隣には、何百人もの僧侶を擁し、建築は巨大で、何千頭もの家畜と潤沢な資産を管理する強力な「ジャス（寺院の財産）」を有する名高い「ヤロー寺院」があったのですが、医者がたった1人しかおらず、部屋も1つしかない「ロドンの白い家」を訪れて診察を受け、病気の不安から解放される人の数は日に日に増え、短いあいだにロドン医師は高い評判を得たのでした。「ロドンの白い家」のロドン准医師はのちに、精神科の権威にして学術博士、教授としてモンゴル全国にその名を知られる医師となりました。

I L：小中学校には通わなかったということですね。当時、地方の若者たちが初めてウランバートルを訪れる際の目的は、主に専門学校で学ぶことだったそうですね。ご自身が初めてウランバートルへいらした際の目的は何でしたか？

S J：私が10歳くらいの時に祖父がこの世を去り、母と私たちの暮らしは大きく変わりました。わが家は祖父の代には家畜も多く、裕福で評判も良い家庭でしたが、祖父の死後、寒害で家畜が死に、私たちの暮らしは落ちぶれて来ました。母は独りきりになり、子どもの私たちは年端もいかず、つらい時期でした。モンゴル人は家畜を失えば生活が苦しくなるのですよ。

母が戸主となったこの時期、わが家はシャラブ・トイン家の近所に暮らし、数年間、移動と宿営を共にするようになりました。シャラブ・トインは祖父の実の弟です。その家は家畜が多く財産もあり、立派な家具を備えた大きなゲルに暮らす、小ざれいな家庭でした。シャラブ・トインと妻のナムジルさんは几帳面で働き者でしたし、町の高官や上層の人びとと深いつながりを持っていました。シャラブ・トインとナムジル夫人は自分たちの家畜や資産をよりいっそう増やして豊かになることしか考えておらず、母や

私たちを助ける気がありませんでした。

わが家の家畜が少なくなって暮らしづりが悪くなるにつれ、私たちに対する彼らの態度には大きな変化が生まれました。わが家がシャラブ・トイン家と共に宿営するようになって以来、彼らの馬の世話をし、冬も夏も深夜の見張りをするのは私の役目になりました。私は彼らの馬の世話をするようになってから5～6年という短期間で馬を増やし、県や郡で評判の駿馬や側対歩の馬を何頭も育てました。私はその家の羊の番や毛刈りをしたり、フェルト作りに加わったり、水や燃料を運んだり、つまりはあらゆる肉体労働をするようになったのです。

こういった仕事は年端もいかぬ子どもにとって苦しいものでしたが、仕事と忍耐力を身につけさせてくれたと思います。当時、わが家の家畜は少なくなっていましたので、ゲルの覆いを交換するためのフェルトを作ることができませんでした。わが家のフェルトは次第にあちこち穴があき、夏には太陽や月が見え、雨がそのまま流れ込むようになりました。シャラブ・トインとナムジル夫人は私たちのこのような状態を知っていましたが、まったく助けてくれなかったばかりか、「家畜のいないあなたたちは何でフェルトを作るのか？」と得意気だったのを私は忘れません。当時、「早く大人になって、母に立派なゲルをたててあげるぞ！」と思っていたのをよく覚えています。「母にどうやって恩返しをしようか、いつの日かきっと母を幸せにするぞ！」という考えが私をとらえたのは、まさにこの時だったでしょう。

わが家はシャラブ・トイン家と共にボルハ川やドノイ谷という場所で春営し、夏になるころにハンガイへ移動し、チゲステイ川の北側で夏を過ごし、秋にはほかの家々と一緒にゴビへ移って秋営し、そこで冬を越していました。ある秋のこと、家々が例年のとおりゴビへ移動を始めようとしていた時、母は弟と私に向かって、

「今年は3人で県の中心地へ行って冬を越しますよ。お母さんはあなたたち2人を学校で勉強させるつもりよ！今後、うちはシャラブ・トインの家と一緒に移動しませんからね。2人とも、どう思う？」と尋ねました。「うちはシャラブ・トインの家とはもう一緒に移動しない」という言葉を聞き、内心とてもうれしく思いましたが、母には、「お母さんに任せます！」と言ったものです。

弟のプレブジャブは母の言葉を聞くと、飛び跳ねて走りまわり、母にキスして

「なんてすてきなんだろう、お母さん。僕、学校に入るんだよね？」と言ったのを私ははっきりと覚えています。その夜、母と弟、そして私の3人は、それまでほとんど味わったことのないような、とてもうれしくて楽しい気持ちを感じていました。母のこの決断は、わが子の将来を考えた、実に正しい決断だったのです。

シャラブ・トインの妻ナムジルさんの几帳面すぎる性格ときつい言葉に当時の私はうんざりし、煩わしく思っていたのですが、おかげで私は仕事を覚えましたし、その後の生活に役立ったと理解しています。シャラブ・トイン家と完全に別れを告げた時、私は、

何年も家畜の世話をし、家庭内のあらゆるきつい仕事をした報酬として、2歳馬1頭と5トゥグルグをもらいました。私が要求したわけではありません。

弟と私の2人はザブハン県を中心地であるオリヤスタイ市の普通教育中学校で1年間だけ学びましたが、生活が困難だったためにその後勉強を続けることができませんでした。私が普通教育の学校で学んだのは、まあこれだけです。

私たちの地方にフフ・ホショーという場所があることは先ほどお話ししましたね。そこは木が多く、きれいな川がいくつも流れ、それに沿って柳の木がたくさん生えているのですよ。地元の人たちが木でゲル（移動式住居）の骨組みや家財道具その他を作り、ホブド、バヤンホンゴル、オブス、ゴビアルタイなど木のあまり生えない県の人びとがそれを買いに来ていました。母は私たち子どもに生活の苦しさをわかるように率直に説明し、わが家はフフ・ホショーへ移ることにしました。移ったのち、母と私は、木で大小の背負いかごやオニ〔ゲルの屋根部分の骨〕、ハナ〔ゲルの壁部分の骨組み〕、トーノ〔ゲルの天窓部分の円形の木枠〕など、ゲルの骨組み部品の作り方を他の人から習いました。私たちもこの仕事をそれなりに覚えたのでしょう、遠くから来た人が私たちの製品を買って行くようになりました。当時はまだ紙幣はあまり流通していませんでした。人びとは母と私の製品を手に入れ、引き換えに乳製品をくれました。このような木工職人の仕事を私は2年くらいしました。

当時、ウランバートルや中央地域の諸県では、ごく小規模ながら工場が操業を始めていたと思います。工業コンビナートも稼働を始めていたでしょう。ちょうどそんなころ、トゥブ県エルデネ郡のツァガーン・ボラグにある石灰工場の人々が、労働者の募集のために私たちの地方にやって来るようになったのです。採用係の人たちがオリヤスタイ市にいと聞き、母と私は行くことにしました。その人たちは母を労働者として採用することにしました。こうして、母と、私の継父となったサンピルさんの2人は、ウランバートルへ行きました。母に遠くへ行かれることは私にとってつらいことでしたが、自分も必ずあとから行くつもりで残りました。私は、早く母のあとを追うことをいつも考えていたはずで。

共に宿営して私をよく知る、地元のおじさんN.チメドレグゼンさんはザブハン県の役所の職員でした。ある時、私はその人に会った際に、ウランバートルにある何かの学校に行かせてくれるよう頼みました。そして何日か経ったある日、私はチメドレグゼンさんの家に招かれました。急いで行くと、彼は

「君をウランバートル市の医療専門学校に行かせることになった。明日、県の役所に行って旅費を受け取りなさい」と言ったのです。当時は、ウランバートルの学校へ進学する者には、県の役所が旅費を出すことになっていました。チメドレンツェンさんは、ザブハン県にたった1つしか割り当てられていなかった医療専門学校の入学枠を私にあてがってくれたのでした。

こうして私はウランバートルへ行くことになりました。当時、ザブハン県からウランバートルまでは、郵便自動車以外に交通手段がありませんでした。今のような飛行機はありませんでした。それで私は郵便自動車に乗り、道中18日かけてウランバートルに到着しました。私の乗った自動車がウランバートルの「モンゴル輸送停車場」に到着すると、何日も私を待って待ちくたびれた母が迎えてくれました。母と私はこうして再会できたことをこの上もなく喜びあったものです。

KY：それはいつのことですか？医療専門学校で学んで医師になったのですか？

S J：1937年の秋のことですよ。母と私は何日かしてから医療専門学校を訪ねました。この学校は現在の保健省の近くにありました。私は校長先生を訪ねました。ザブハン県を出る時、私は県知事に入学証明書をもらいました。それを校長先生に見せました。すると校長先生は、

「よし、わかった。寄宿舎に入りなさい！着替えなさい、風呂に入りなさい！授業はまもなく始まる。それまでこれこれこういう準備をしていなさい！」という意味のことを言いました。私は校長先生に「はい！」と返事をしてその部屋を出ました。外には、母が待っていました。そして私は母に、

「母さん、僕、この学校には入らない！母さんと一緒に、ツァガン・ボラグの石灰工場に働きに行くよ！工場で母さん1人が働いても、あまり給料はもらえていないでしょう！」と言いました。母は何も言わず、黙っていました。「母は賛成ではないのだ」と悟りました。それから母と私はこのことを十分話し合いました。最後は私の勝ちでした。

当時、私はもうすぐ15歳になろうというところでした。「未成年の子どもは採用されないだろう」と母は心配していたのです。国营工場が未成年の子どもを働かせることは法律で禁止されていたのです。それを私はのちに理解しました。

そして数日後、私たちはツァガン・ボラグの石灰工場がある、エルデネ郡へやって来ました。サンプルさんと私は一緒に石灰工場へ行き、工場長に会いました。工場長はS.ダグワドルジという人でした。私はその人に、就職を希望する「申請書」を提出しました。ダグワドルジ工場長は私の申請書を読み、

「君は就労年齢に達していませんね。未成年は採用しないのですよ！それに君は、こんな重労働ができるのですか？ここでは山を崩す作業をしているのですよ！」と言います。私は何も答えられませんでした。すると、サンプルさんが

「うちのジャランアージュャブならこの仕事はできるでしょう。地方にいた時には、家畜の世話をよくする子どもでした。それに木工職人もしていたのですよ！」というように、私をほめるような言葉をいくつか発しました。工場長は彼の言葉を注意深く聞いて、

「なるほど。それなら1つ方法があります。未成年なので、作業助手としてなら採用

できるでしょう。君の労働時間は1日に6時間だけです！他の人と同じ8時間ではありません。君の所属する作業班を今、決めます！」と言いました。こうして、私の希望はかない、石灰工場の労働者になったのです。

2 石灰工場の労働者

KY：国に関わる仕事の出発点は石灰工場での労働者だったわけですね。それでは、どのようにして法律家になられたのか、お話しいただけますか？

SJ：ツァーガン・ボラグの石灰工場は、ウランバートルに石灰を供給する、わが国の主要な建築資材工場でした。

ダグワドルジ工場長は、私の所属する作業班を本当にその日のうちに決めました。私は、T.アミル班長率いる、主にカザフ人とウズベク人で構成された作業班で働くことになりました。班長のアミルさんは、モンゴル語が流暢なウズベク人でした。作業に加わった日、私は作業道具となる鋤、つるはし、ハンマー、鋭い刃ののみ、中に火薬の入った白い導火線と缶に入った火薬をアミルさんから受け取りました。そして、私はジャムバーというモンゴル人青年と一緒に作業することになりました。作業班には、私たち2人以外にモンゴル人はいませんでした。

当時、私たちは、石灰をロシアの「ウラル・ジス5」という車に積み込む作業をしていました。のちに、ガタガタと鳴る、背が低くて黒い車に積み込むようになりました。これはハルハ河戦争での日本からの戦利品だそうです。一体、どういう経緯でこの工場に来たのでしょうかね。

そのころ、ウランバートル市は開発が始まったばかりでした。私はその工場で石工の仕事をすることになりました。石灰岩に直径約1メートル、深さ70～80センチメートルの穴をあけ、その穴の底に発破をしかけ、それを湿った石灰で埋めます。そして、導火線のもう一方の端にマッチで火をつけます。火が発破まで伝っていき、爆発するのです。自分たちは爆発が起こる前にそこから退避しなくてはなりません。そのため、私たちは表に出ている導火線の先にマッチをすって火をつけるなり、一目散に走って退避したものです。

アミル班長は自分でもよく働かし、自分の作業班の作業員に対しても要求水準の高い人でした。私は仕事の覚えが早く、ジャムバーと私は「しっかり働いている」と班長にほめられるようになりました。

未成年でしたので、工場長に言われたとおり1日の労働時間は6時間のはずでした。ですが、仕事に慣れて作業が上達するにつれ、8時間働くようになりました。10時間労働のことさえありました。時には、石灰を燃やす作業のため、深夜に出勤することもありました。私の労働時間を監督する人はいなくなりました。

こうして働いているうちに、初めての給料をもらうことになりました。こんなに高い給料をもらったのは初めてでした。私はこんなに高い給料をもらったことにとても驚き、そしてたいそう喜びました。基本給のほかに残業手当が加わり、受け取ったのは全部で800トゥグルグでした。私は給料をもらうとまっしぐらに駆けて行き、デール1着分の青い絹布と、デール1着分の深緑色の絹布を買い、缶入りのロシアの飴も買い加え、残りのお金と一緒に母に持って行ってあげました。仕事場からそう遠くないところに、私たちの工場の労働者向けの商店がありました。その商店では主にドイツ製品を売っていました。

母はその日、とても喜びました。母は私においしいポーズを作ってくれ、『男は成長し、フェルトはのびる』とはこのことね!』と何度も何度も言いました。800トゥグルグとは、当時の価値ではかなりの大金だったのです。良い馬1頭が20トゥグルグ、羊1頭が6トゥグルグの時代ですよ。祖父には、「1人前になったら母親を幸せにしてあげるんだぞ」と幼いころから言い聞かされていました。祖父からの教えはたくさんあります。「罪を犯してはならない!いつでも善い行いを積まなくてはいけない!人のためになることをしなくてはいけない!誰のことも、決して悪く言うてはいけない!」と祖父には教わりました。

モンゴル人の心理には1つの特徴があります。それは父母の恩に報いよう、恩返しに父母を幸せにしようという願いです。モンゴル人の誰もがこのような想いを持っていると私は思います。とりわけ、母親を幸せにして恩返しをしたいと願う気持ちはたいへん強いものです。わが国の民謡や創作歌謡、詩には母親にまつわる主題がとても大きな位置を占めていることに、あなたがたはお気づきでしょう。父母の恩はたとえようもなく大きなものなので、どんな人も父母に対して完全な恩返しはできない。だから人はほんのわずかでも自分の両親を常に喜ばせるべきなのだ、という考え方があるのです。雨のあとで草の葉についた小さな水滴を、モンゴル人は「シューデル(露)」と言いますね。そのような水滴を集めるのは骨の折れることで、お椀一杯集めるためにどれだけがんばっても、きりがないと言います。モンゴル人は、父母の恩と善行に報いることを、露水を集めるようなものだと考えているのです。

ツァーガン・ボラグの石灰工場では、2年間、このような形で働きました。ダグワドルジ工場長は私に親切にしてくれました。モンゴル文字での読み書きと、つたないながらも四則計算ができたおかげかもしれません。

1939年、ツァーガン・ボラグの石灰工場の管理部は、私をウランバートルの「財政専門学校」に入学させることを決定しました。当時、モンゴルにはまだ大学が設立されていませんでしたが、立派な専門学校は何校もあったのですよ。それで、私は財政専門学校で学ぶために、ふたたびウランバートルにやって来ました。

親類のおじさんのゲルが現在のボグド・ハーン宮殿博物館のあたりにありました。そ

のおじさんはS.ドドゴルと言います。母と私はおじさんのゲルに何日か泊まりました。財政専門学校に行く前に、入学の準備をしていました。

ドドゴルさんのゲルの北側には、ナライハへ向かう細い鉄道が走っていました。ゲルの東側には「川岸の娯楽会場」があります。この「川岸の娯楽会場」とは、ナーダム〔毎年夏に開催される国民の祭典〕を行う場所です。その南側には大きな広場があります。ナーダムの時にはそこに各種の出店がたち、大勢の人が集まったものです。さらに南には、トール川の岸辺に、屋根が緑色の、白い建物がいくつかがたまって建っていました。この一群の白い建物のあたりで、毎夜、大勢の人びとが歌を歌ってパレードをしているのに気づきました。この人たちが全員そろいの緑色のデール、とんがり帽子、革靴を身につけているのに私は目をひかれました。何者が何をしているのか、私にはちっともわかりませんでした。その人たちがとても珍しく思われ、私は何日も眺めました。そしてある日、ドドゴルおじさんが仕事を終えて帰宅した時に、

「この家の東側にある、緑の屋根の白い建物は何ですか？」と尋ねました。ドドゴルおじさんは、

「あれかい。あれは『党・国家中央学校』だよ。あそこでは幹部になる人ばかりを養成しているんだ。とてもすばらしい学校だよ！」と言います。翌日、私はまたそこへ行きました。大勢の人が歌を歌いながらパレードをしています。「この学校に入学するにはどうしたらいいんだろう？」と考えました。そして、ドドゴルおじさんの家に戻って来ると、母に、

「母さん、僕、『党・国家中央学校』に入るよ！入学できるものかなあ？どうやって入るんだろう？」と尋ねました。

母は私の言葉を聞くと、

「母さんには見当もつかないわよ！あの学校に入れるものなのか、入れないものなのか。幹部養成の学校なら、私たちのような者は入学させないでしょうよ。ドドゴルおじさんに聞いてごらん」と言います。

それで、私はもう一度、ドドゴルおじさんとその学校の話をしました。その話で、入学を希望する「申請書」を書き、モンゴル人民革命党中央委員会の人事部長であるD.ドルジパラムという人と会う必要があることがわかりました。「モンゴル人民革命党中央委員会」とは何をする組織なのか。どこにあるのか。見当もつきません。私がこの組織の名前を聞いたのは、ほとんど初めてのことだったでしょう。それから、党中央委員会の本部の場所をドドゴルおじさんに詳しく教えてもらいました。

3 党・国家中央学校への入学

S J：翌日、私は自分で入学希望「申請書」を書きました。そして、母を連れて党中央

委員会の本部庁舎へ行きました。当時、人民革命党の中央本部は、ちょうど現在と同じ場所にあったのです。現在のように大きくて白いビルではなく、小さくて白い建物がありました。私はその小さくて白い建物に入りました。そこに受付係が座っています。受付係は私をじろじろ見て、

「子どもがここに何をしに来た？」と見下したように尋ねます。私は、

「ええと、僕はモンゴル人民革命党中央委員会の人事部長S.ドルジパラムという人に会いに来たのです。その人と会うことはできるでしょうか？」と尋ねました。「僕を中に通してくれないのではないかと、内心とても不安だったと思います。受付係は私の質問に答えず、だいぶ間があいたような感じになりました。

「それで、人事部長と会う用件は？」と言います。私は、

「ええと、僕にはその人と会う、とてもだいじな用事があるんです！」と言いました。

すると受付係は私を見て目をまるくしましたが、何を考えていたものか、

「そこに立って待っていなさい」と言うと、先ほど私が入ってきた入口を指差します。私はその人の指し示した場所に行って立ちました。「子どもは中へ通さない。出ろ！」と言われると思いました。受付係は電話をかけています。私はずいぶん長いあいだ待ちました。

そうしていたところ、受付係が手で合図して私を呼びます。

「それでは、1階のこの部屋に行きなさい」と言って、部屋番号を書いた紙切れをくれました。探しながら進むうち、部屋が見つかったので、中に入りました。そこには、浅黒い顔をした人が座っています。その人は、

「さて、君はどんな用で来たのかな？」と尋ねます。

「おじさん、僕はあなたにこの『申請書』を提出しに来たのです！」と言ってその人に渡しました。その人は私の書いた『申請書』を読みはしませんでした。ためつすがめつしています。今思えば、どんな紙に何を書いて提出したものだったやら。ろくなものではなかったでしょうね。

するとその人は、

「ふむ。それで、君は読み書きができるのかね？できないのかね？」と尋ねます。

私は、

「できます！」とだけ言いました。

するとその人は、

「うむ。それではこの一覧表の枠線を引いていなさい。30部作るんだぞ。きれいに、丁寧にやりなさい。私はこれから会議に出てくる」と言うと、大量の紙と1本の定規、鉛筆、一覧表をよこし、自分は出て行ってしまいました。私はその一覧表の線を引き、写す作業をしていました。精一杯、きれいに、丁寧にしよう努力しました。その人が戻って来ないまま、ずいぶん経ちました。

私が表の線を引き終わった時、その人は戻って来て、私のした仕事を注意深く調べ始めました。その人は1枚1枚表を見終わると、

「うむ。よろしい！よくできている！」と言いましたよ。そして、紙を1枚取って何か書きました。それを私にわたすと、

「この文書を持って『党・国家中央学校』のL. セレーテル校長のところへ行きなさい」と言いました。部屋を出てすぐその文書を読んでもみると、「この子どもに試験を受けさせること！D.ドルジバラム」と書かれていました。

こうして、目的がみごと達成されたことを喜びながらその建物を出てくると、表で私のことを何時間も待って待ちくたびれ、心配した様子の母がいたのです。

1937～38年ごろ、モンゴルでは多くの人びとが何の理由もなく逮捕されたり死刑になったりする悲劇が起きました。「粛清」がさかんに行われていた時代です。私がその建物から出てこないまま長い時間が過ぎたので、母は「うちの息子は逮捕されたのではないかしら？」と心配していたようです。こうして、母と私は無事に帰って来ました。

その夜、ドドゴルおじさんにその日のできごとを話しました。おじさんは私の成果があがったことをとても喜んでいます。当時、一般人が人民革命党中央委員会の本部に行くことはほとんどなかったはずで。それどころか、私のように入学希望の「申請書」を持参する人があったのでしょうか？私は「モンゴル人民革命党中央委員会」なる言葉の意味もほとんどわからないのに、そこへ入学希望の「申請書」を持って行ってしまった人というわけですよ。何をしている、何という組織であるかも、まるで知らない人間が訪ねたわけです。「愚か者でもちょうど真ん中に」とモンゴル人は言いますよ。まさにそれだったのです。うちのドドゴルおじさんさえも、その建物には入ったことがなかったのですからね。おじさんは私のことを「ずいぶん勇気があるな！」とほめました。

翌日、私は母を連れて党・国家中央学校へ行きました。そこでセレーテル校長と会いました。私はドルジバラムさんにもらった文書を校長に渡しました。校長はそれを読んでから、「受験を許可する。L.セレーテル」と書かれたもう1枚の文書を私にくれました。校長はこの文書を私に渡すと、

「試験は明日始まります。遅れないように！」と言いました。

私は、

「先生！どんな試験なんですか？」と尋ねたことを、今もはっきり覚えています。

「モンゴル文字、算術、政治の試験です！しっかり準備したのでしょうか？」と校長は言っていました。そして、母と私はドドゴルおじさんの家に戻って来ました。私は「政治」とは何なのか、やはり知りません。それで、またドドゴルおじさんに、どういう意味の言葉なのか尋ねました。

「よく知らないがね、きっと、世界情勢やモンゴルの国内・国外情勢について答える必要があるだろうよ」と、おじさんは言います。そして、

「この本をよく読みなさい」と、私に灰色のハードカバーの本を渡しました。その本は『I. V. スターリン・ソ連共産党第18回大会報告』という題でした。たった一晩でこの本を全部読み終えることなんてできませんよ。それに、この主題が、私の受ける試験に役立つのかどうか。さっぱりです。それでも役に立つかもしれないと思い、かなりの数の文をまる暗記しました。

そして翌日、試験に臨みました。私はもともと「算術」が苦手でした。足し算と引き算はできます。しかし、掛け算と割り算は得意ではないのです。私と一緒に試験を受けた年上の男の人はちゃんと計算ができています。それで、その人の回答をまる写しにしてみました。「モンゴル文字」の試験は自力で乗り切りました。そして、「政治」の試験の番になりました。ドドゴルおじさんに渡された例の本の中から「5億人を巻き込んだ第2次世界大戦は、上海からジブラルタル海峡に至る範囲にわたっている」というような文章を暗記したのをはっきり思い出します。本の中から暗記したその他の文章を思い出そうとしました。だいたい覚えています。「モンゴル革命青年同盟規則」からも、私はかなりの数の文章を暗記しました。そういったものはほとんど覚えています。こうして、試験会場の部屋に入りました。そして、出題をしている先生の前に腰かけ、例の、暗記したことを思い出しながら述べ始めました。今思えば、何を述べたものだったか。ずいぶん長々と述べていたように思われます。本来は、先生のほうが私に出題をするはずでしょう。

すると先生は、

「はい、よろしい。たいへん結構です！」と言いましたよ。私は怖さと驚きがないまぜになって動転し、汗をかき、膝が震えていたのを思い出します。

それで試験には合格したようで、党・国家中央学校に入学することになりました。当時、この学校は「政治」「法律」の主要2クラスがありました。この学校は当初、1924年に「臨時の党学校」の名で、19～30歳の約60人を生徒として設立されたという歴史があります。設立には、人民革命党中央委員会のTs. ダムバドルジ委員長が中心的役割を果たしました。開校式はボグド・ハーンのハイスタイ宮殿で行われ、B. ツェレンドルジ首相やP. ゲンデン国家小会議議長たちが参列しました。初代校長は人民革命党の幹部会員N. ハヤンヒャルワー、教員はB. ツェレンドルジ、S. ダンザン、J. ツェベーン、R. エルベグドルジ、G. ドルジバラムでした。この人たちはモンゴルの現代史にその名を残した著名人たちですよ。1940年までの16年間に卒業生を17回、1309人輩出しています。こういった人たちはすべて国家行政の指導的な役目につきました。それ以外にも経済専門家や会計士を100人余り養成したのです。

昨年はこの学校の80周年でした。今では「管理発展アカデミー」と呼ぶようになりました。

私はこの学校で2年間学び、成績「優」、規律「優」で卒業しました。私たちがこの

学校で学んでいた時分に起きた一大事業といえば、全国で展開された「畜毛は黄金」運動です。

それ以前はさほど利用されていなかった羊毛や山羊の毛を、捨てずに集める大事業が展開されました。この事業には、ウランバートル市の工場や公共機関の労働者、職員、専門学校の学生たちが大量動員されました。わが校の学生たちも動員されました。私たちは、山羊の毛を鉄製の櫛ですく手順や、羊毛を刈る手順についての事前指導と訓練を受けました。そして6月、地方へ派遣される当日に「中央物品基地」の敷地で壮行会が行われました。この壮行会には、首相のKh.チョイバルサン元帥、ユムジャーギーン・ツェデンバル人民革命党中央委員会書記長が参列したのですよ。1人ひとりに、鉄でできた「山羊用櫛」が手渡され、国中を巻き込んだこの重大事業への積極的参加が指示されました。

私はザブハン県のバヤンオール郡（現在はゴビアルタイ県に属している）に派遣されました。そして「駅」から馬を借りて乗り、学校の生徒たちを連れて、郡のほとんどすべての家庭を訪問し、羊毛の刈り方、山羊の毛を鉄製の櫛ですくやり方を指導したものです。これはわが国で畜産素材を計画的に利用する一大事業の始まりとなったのです。私は、この事業に参加したのち、8月にウランバートルに戻って来ました。ウランバートルに戻ると、わが校は廃止され、「幹部学校」に作り変えられていました。私は新設された幹部学校に入学希望をだすつもりで、しばらく過ごしました。

このころ、この学校への詳細な入学規則の適用が始まったのです。入学希望を出した者には、まず入学試験を受けさせる。合格者については、人民革命党中央委員会書記の会議で議題とする。人民革命党の書記たちがその者に諸々の質問をし、答えさせる。彼らはこんなふうにして、1人ひとりの人となりをよく見たのでした。そうして、その人が資格を満たしていれば、党中央委員会の決議が出され、入学の道が開かれたのです。

新設の幹部学校には、とりわけ最初の何年かは、ウランバートルや県の党委員会書記や県知事、その副官、工場や企業の長、公共機関の指導者など、責任ある立場の人びとが優先的に入学していました。また、成績、規律に優れ、さきざき学業の前途がある優秀な若者もこの学校に入学させる方針が一貫してとられていました。私に関しては、それまでに党や国家の責任ある仕事にはついていませんでしたが、党・国家中央学校を「優」で卒業し、入学試験の成績も良かったので、この学校に入学することができました。

幹部学校の校長は、党中央委員会の幹部会員で書記、チョイバルサン首相の第1副首相であるCh.スレンジャブ氏が長年務めました。当時、わが国では、国民の教育水準の全体的向上、とりわけ指導の人材と専門家の養成に関して、転換的な多くの方策が講じられました。1941年に私の入学した「幹部学校」が、1942年に「モンゴル国立大学」

がそれぞれ設立されたことは、高等教育を受け、高度な専門性を持った人材の養成に重要な一歩となりました。この2つの学校の設立は、党中央委員会のツェデンバル書記長が最初に提案したものでした。

ユムジャーギーン・ツェデンバルは幹部学校で「経済学概論」の授業を受け持っていました。私たちにこの科目を教えるにあたり、ツェデンバルはマルクスの『資本論』という有名な著作の考え方に依拠しました。当時、『資本論』はまだモンゴル語に翻訳されておらず、ツェデンバルはそれをロシア語のまま読み、研究したのでしょう。ドイツの天才カール・マルクスがこの著作で、資本主義社会の経済法則と社会の生産関係の特徴を実に深く分析し、理論的結論を出したことを、ツェデンバルは私たちに実にみごとに説明してくれたものです。彼は『資本論』に出てくる政治・経済学用語の意味を黒板にチョークで書いて説明してくれました。なんとといっても、カール・マルクスのこの有名な著作を研究し、政治・経済学の講義をした最初のモンゴル人は、ユムジャーギーン・ツェデンバルです。この点で、彼と肩を並べる者は1人もいなかったと言えます。ツェデンバルこそ、特別に高度な経済学の教養を身につけた、わが国最初の偉大な知識人の1人でした。彼はどんな人にもわかるように説明する能力があり、幅広い知識をもち、やさしい言葉で順序だててわかりやすく話のできる人だったのですよ。私は、のちに何度も彼と一緒に地方やあちこちを訪問し、多くの人に会い、何度も彼の話を聴いてきた人間として、これを証言しておきます。

「世界史」の授業はバザリーン・シレンデブが受け持っていました。この人は人民革命党中央委員会政治局員、書記という役職を務めたのち、国民教育大臣、モンゴル国立大学の初代学長、モンゴル科学アカデミー初代総裁として選出され、歴任したのですね。後年、アカデミー会員となったD.アヨールザナ、Sh.ロブサンワンダン、功勞教師となったD.ツェデンジャブ、S.ジャミヤンダグワといった顔ぶれが、教鞭を取っていました。

Sh.ロブサンワンダン先生は、まさに偉大な教師であり真の学者でした。いくつもの外国語を独学で、ご自身のたいへんな努力、類まれな才能と頭脳でもって習得したのですからね。ロブサンワンダン先生こそ、モンゴル語学の功勞者として永遠にその名の残る人です。私たちは、ロブサンワンダン先生の作られた「モンゴル語正書法」を今でも使い続けています〔ロブサンワンダンはキリル文字による正書法作成委員会（新文字中央委員会）のメンバー11人の1人〕。

D.アヨールザナ先生はのちに、ファインウールのとれる「オルホン」種の羊を作り出し、国家賞を受賞しましたね。先生は、モンゴル羊をファインウール羊とかけあわせる実験を成功させ、みごと新種の羊をモンゴルに誕生させた、偉大な学者であり偉大な功勞者ですね。

自宅で母にモンゴル文字を習い、四則計算のやり方も学びましたし、オリヤスタイの

10年制学校で1年だけ学んだ私という人間が、初めて故郷を離れていたわけです。

幹部学校に入学し、学んでいるあいだ、私は将来の仕事について何も考えていませんでした。母に「学のある人間になりなさい。しっかり勉強しなさい!」と言われていたことをいつも思っただけでした。1930～1940年代の時は、学校で学ぶために地方からウランバートルへ出てきた者たちの大半が、家畜や財産が乏しい家や子どもさんの家庭の子どもでした。当時、富裕な人びとは大勢いましたが、彼らには子どもを学校にやる気がちっともありませんでした。苦勞、とりわけ貧しさゆえの苦勞を味わったり上流の人びとの傲慢なふるまいを受けたりしてきた人間は、人一倍、生活のため、勉学のために励み、粉骨砕身するものでしょう。

私の学生時代、われわれ幹部学校の学生は「教宣作業班」を率いて地方で活動したものでした。当時はそのような教宣作業班がモンゴル国全県に派遣されていたのです。教宣作業班は地方で大衆のために映画を上映したり、時には歌や演奏の曲目を披露したりしながら、モンゴルの国内情勢や国際情勢の話をしていたのです。地方の牧民・遊牧民大衆は教宣作業班が来ることをたいへん好み、大喜びで迎えてくれたものです。

私が教宣作業班を率いて故郷のザブハン県に行き、県の中心地の公的機関の幹部全員を文化会館に集め、国際情勢について4時間あまりの講義をした時には、みなさん私の話に大いに興味を持ち、たくさんの質問が出されましたが、このことははっきり覚えています。私の講義のあと、大勢の人が私に歓迎の挨拶をしましたが、その中でもザブハン県知事と県の人民革命党委員長本人が挨拶しに来ていたことに、私は励まされました。こういったことから、私は、知識を豊富にし、自分の知識を人びとに伝える話の仕方を覚える重要性をますます理解するようになり、教師の仕事が面白いと思うようになったのです。

4 母校の教壇に立つ

S J：わが校の第1期生は1943年に卒業しました。卒業生は43人でした。彼らは全員、ウランバートル市や地方の県で人民革命党や国、公的機関での責任ある役職にいきなり任命されました。たとえば、私の同級生のS.ダムディンはモンゴル革命青年同盟中央委員会の第1書記、Ts.ダシデンデブはモンゴル人民共和国政府の官房長、T.ダムビーニャムは農牧業省の副大臣、B.パンズラグチ、J.チョイジャムツ、S.パルジルは地方の人民革命党の県委員会第1書記、S.サムダンはウランバートル市検事として、それぞれ任命されました。

学校当局の決定によって、私は母校の教師として残されました。人民革命党や政府の指導的人材を養成するこの重要な学校で教師を務めるだけの知識も経験も技量も私は不十分であることはわかりきっていました。しかし、わが校の校長は、この決定を下す時

「これから短期間のうちに知識と教養を深め、教師としての技量を身につけることができる」と私を見込んだのでしょう。それで私は校長から「ソ連共産党史」の教師に任命されました。

当時、モンゴル語で書かれた「ソ連共産党史」の教科書はほとんどありませんでした。モンゴル語による最初の教科書がやっと出版され始めたころです。ところが、その教科書はごくわずかししか出版されなかったのも、全員そろってそれを手に入れて読むことは不可能でした。1944年以降、党中央委員会の要請により、ソ連共産党中央委員会付属社会科学アカデミーの聴講生用にY.ヤロスラフスキーという人が編集した『ソ連共産党史講義集』がわが校に送られるようになりました。私はロシア語はほとんどわからなかったのですが、辞書を手がかりにその本を読もうと夜も昼も努力しているうちに、だいたいの意味がわかるようになりました。こうして、自分で理解したことを学生に話してきかせるようになりました。

ちょうどこのころ、党中央委員会の決定によって、私におそるべき「指令」が下されました。党中央委員会のD.トゥムルオチルが哲学をテーマに、私ジャランアージュバがソ連共産党（ボリシェビキ）史をテーマに、講義を準備し、小冊子として出版するという決定です。グラミン・トゥムルオチルは当時、わが校の教務主任を務めていました。のちに、彼は党中央委員会政治局員、書記に選出されました。

私はこのような大きな課題を与えられ、V.I.レーニンの『何をなすべきか？』、『一歩前進、二歩後退』、『唯物論と経験批判論』、『国家と革命』、『社会主義革命における社会民主党の2つの戦術』、『民主主義革命における社会民主党の2つの戦術』の2つのか、『共産主義における「左翼」小児病』などの著作を、昼も夜もロシア語で読みました。これらはレーニンの最も有名な著作にしてマルクス・レーニン主義の教えの中で最良の書物でした。

このおかげで私はソ連共産党史をテーマに60余りの講義をまとめ、20冊余りの小冊子を出版しました。人びとはこれらの小冊子に「ジャランアージュバの講義集」という名前を与えてくれました。私の出版した小冊子は何年ものあいだ、わが国の大学の教師や学生たちのあいだで手から手へと受け継がれ、「ハンドブック」になったのですよ。私の知識や教養の水準のせいで、これらの講義が質的に充分ではなかったのはもちろんのことですが、何年ものあいだ、これらの講義を多くの人が読みハンドブックとして利用し、わざわざ私のところにお礼を言いに来る人もいまして、このことは、私にとって大きな励みとなりました。

5 法律研究への道

S J：幹部学校を卒業して7年後の1951年、私はソ連のイルクーツク市にある国立大

学に入学し、1956年に法律と歴史を専門として卒業しました。大学での卒業論文は、「1926年に行われたモンゴル人民共和国の裁判改革」をテーマに書きました。私の卒論の指導教官は、多くの書物を著してソ連でたいへん有名な学者のN.F. ファルベロフでした。ファルベロフ先生は、私の卒論が無事合格となったあとで、「私はソ連科学アカデミーの国家・法研究所に勤めることになりました。君もうちの研究所に来て私の指導のもとで学位をとるための勉強をしてもよろしい。手伝ってあげますよ」と言いました。私はとても喜び、モスクワへ行ってソ連科学アカデミーの国家・法研究所の博士課程に入学することで先生と合意しました。ですが、私がこの研究所の大学院で昼間勉強する望みは実現しませんでした。とはいえ、公的な仕事のあき時間や休みを利用して「人民政府の立法作業の基本方針：1921-1941年」というテーマで学位論文を書き、1967年にソ連科学アカデミー国家・法研究所の学術評議会で無事に学位を取得しました。着手した仕事をこのように無事終わらせるにあたり、この研究所の研究員や師であるファルベロフ先生が親身の手助けをしてくださったことを、私は決して忘れません。

私をソ連の学校に派遣し、法律の専門の習得と学位取得のために支援してくれた党中央委員会とその指導部に感謝していることを、私はここで申し上げたいと思います。わが国の社会主義システム時代の政権党であったモンゴル人民革命党が、国家の発展と国民の生活、文化水準の向上のためにたいへんな尽力をしていたことは特筆すべきだと思います。何千もの青年を国内の大学やソ連その他の社会主義諸国において無償で学ばせ、各種の専門を身につけさせました。この事業こそ、モンゴル国の発展と繁栄に評価しつくせないほどの意義をもたらしました。

I L：イルクーツク国立大学を卒業して帰国なさってからは、法律家として仕事をなさったのですか、それとも別の仕事をされたのですか？どこに就職されましたか？

S J：イルクーツクで大学を卒業したあと、私は幹部学校の教務主任に任命され、「モンゴル人民共和国の法制の基礎」の科目を担当することになりました。それで「教職と研究職以外の仕事はしない」という意気込みで着任しました。

教鞭をとるかたわら、研究も粘り強く始めました。私はモンゴルの法律の歴史的発展に関心を持って研究し、「ハルハ・ジロムとはモンゴル法令のいにしへの記念碑的文書である」と題する、初めての大きな学術的著作を1958年に出版しました。

「ハルハ・ジロム」は、モンゴル法の発展における最も影響力の大きな文献です。「ハルハ・ジロム」法典は、1709年ごろ、ハルハのトゥシェート・ハンをはじめとするモンゴルの王公貴族、政治や宗教の指導者、学者たちが、現在のボルガン県とセレンゲ県の境にあるイベン河畔で会議を開いて制定したという歴史があります。それ以来、20回余りにわたって修正や変更、追加が行われました。「ハルハ・ジロム」に関しては「パローン・フレーのハルハ・ジロム」、「イフ・フレーのハルハ・ジロム」という2つのテキストがモンゴル国立中央図書館の手稿フォンドに保管されてきました。私は「ハル

ハ・ジロム」に含まれるすべての判例を分類し、全14章301条に分け、いくつかの用語に解説を書き、詳しい序文を書いて出版しました。今後、この有名な「ハルハ・ジロム」の全体およびその中に含まれる多くの法典、さまざまな判例の分析と詳しい研究は、歴史研究とモンゴル法思想の発展に重要な意義があると思います。私自身は「ハルハ・ジロム」法典をテーマに国際学術会議に何度も参加し、議論をしてきました。

また、歴史上「オラーン・ハツァルト」の名で知られる刑法・民法を分類し、2つの章に分け、古いモンゴル文字から現在用いているキリル文字に転写し、詳しい解説をつけて出版するという仕事を行ってきました。「オラーン・ハツァルト」は、イフ・シャビ衙門で基本的に「ハルハ・ジロム」法典に従い、行った裁きのさまざまな判例集です。つまり、裁判の実践やその後それらと似たような案件を裁く時の見本として用いることのできる判例集なのです。「オラーン・ハツァルト」を調べてみれば、昔のモンゴルの裁判官が、当該の案件が違法であるかどうか、違法であるならどのような法令が適用されるのか、その案件にはどの種のどの程度の刑罰が科されるのかを、適正に判断していたことがわかります。

それ以外に、私はモンゴルのフビライ・ハーンの「国家統治計画」すなわち歴史的には『十福全史』の名で知られる文献を研究し、小冊子を出版しました。『十福全史』はモンゴルの法制思想の発展に特別な位置を占める重要な文献です。モンゴルの法制思想の伝統はとても巨大なものです。あなたがたはチンギス・ハーンの「イフ・ザサグ」法典について聞いたことがあるかもしれません。これはモンゴルの法制思想の最高峰なのです。当時、法律はたいへん厳しいものでした。それを厳格に守っていたのです。そのころ、そのような法律を持つ国はあったかどうか、知りません。私たち自身がそのようにして世界を率いたのです。ただ馬に乗って剣を振り回し、思い上がった野放図なモンゴル人があたりかまわず駆け回っていたわけではないのです。歴史をそんなふうに単純化してはいけません。

私自身はモンゴルの制度、モンゴル法思想の伝統とそれらに関連するいくつかの主要な法を研究するとともに、法制理論、法哲学の分野でも研究をしてきました。また、モンゴルの大学で法学を専攻する学生やこの分野の仕事をしている専門家向けに『法制理論』と題する書物を出版しました。私はこの書物を準備する際、自分の書いた講座をもとにしました。これまでに私は歴史、法律、政治研究をテーマにした学術論文を何十本も書いて発表しました。

私自身は1959年から1984年まで別の仕事に移りましたが、教職を完全に離れたわけではありませんでした。モンゴル（人民共和）国検事総長、モンゴル（人民共和）国閣僚会議法律委員長（法務大臣）、情報・ラジオ・テレビ国家委員長の職務にあった時も、わずかな時間ながら、モンゴル国立大学で「モンゴル人民共和国の法制」、「法哲学」をテーマに講義を行っていました。また、人民革命党中央委員会政治局員、書記という要

職にあった当時も、都合さえつけばわずかな時間数ながら国立大学で講義を行っていました。

私の自慢の1つは、1943年、21～22歳の時から教師というすばらしい肩書きを持ち、この有徳の仕事を専任・非常勤の形で30年近くも務め、何百人もの教え子がいることです。私の教え子の主な顔ぶれは、人民革命党、国家、公的機関、法律、文化、教育、産業のさまざまな機関の指導的役職や、モンゴル国の法律関係官庁の中心的な人材となり、それを支える「法律家」という普遍的にしてすばらしい専門を身につけた人たちです。私が教鞭を取っていた当時の仕事を評価し、私が在職していたモンゴル国立大学や管理発展アカデミーなど現代モンゴルの知的頂点である学校が私に「名誉教授」の称号を与えてくださったことに深く感謝しています。

こうして教職と学術研究をしていたところ、ある時、人民革命党中央委員会の思想・文化問題担当書記D.トゥムルオチルと会った際「君、人民革命党中央委員会に来て私といっしょに働きたまえ！私の仕事を手伝うのだ！今、各地で能率の向上が緊要の問題になっている！」と言われました。私は彼のこの提案を辞退しましたが、彼は重ねて何度もこの提案をしました。ある日の授業中、私が黒板のところでチョークを持ち、学生の前に立っていたところにS.ドルジバト校長が教室に入って来て、

「人民革命党書記長のツェデンバル氏が君を呼んでいる。先ほど私のところに電話があった。今すぐ急いで来るようにとのことだ。早く行くように！」と言うと出て行ってしまいました。それで私は授業を終わりにし、急いで党中央委員会へ行きました。書記長の執務室に入ると、そこにはツェデンバル書記長のほかにトゥムルオチルが座っていました。ツェデンバル書記長は私が部屋に入るのを見ると、自分のそばの空いている椅子を示して座るよう促しました。そして、

「このトゥムルオチル同志が君を党中央委員会の課長に任命してほしいと言って聞かないのだよ！私は本来、君を“法律家”という専門を活かして非常に重要な職に任命するつもりだった。ところが、トゥムルオチルは君を絶対に中央委員会の課長に任命してくれと言って聞かないのだ。だから、われわれは君をこの同志の手にゆだねることにした。君たちは同僚だったし、お互いのことをよく知っているはずだ。これからこの問題を党中央委員会政治局会議にかける」と言いました。私はそれまで、トゥムルオチルからの提案を何度も断っていましたが、この時ばかりはツェデンバル書記長の提案を断ることはできませんでした。「はい！」と言って了解してしまいました。

こうして、私は党中央委員会の思想・文化課長に任命されたのです。この部署に勤めるようになり、新しい仕事にもなじみ、ずいぶんと手馴れていきました。私の上司はダラミン・トゥムルオチルでした。私は幹部学校で彼の同僚でしたし、お互いのやりかたを知っており、お互いによく理解し合っていたので、新しい仕事にたいへん役立ちました。わが幹部学校は1958年に、「党大学」に改編されました。

6 検事総長に就任

S J：そんな具合に仕事をしていたある時、ツェデンバル書記長が私を呼びました。党中央委員会に勤めるようになって以来、毎日の仕事の中で、彼に呼ばれて指示を受けるのはいつものことだったので、この時もとくになんとも思わず、私は彼の執務室にためらいなく入りました。すると、書記長は、「話というのは、君を“堅い鞍”に腰かけさせる件だ」と言うのです。私はちょっと面食らいました。そして、「書記長、それはどういう意味でしょうか？」と尋ねました。すると、書記長は、「君をモンゴル国検事総長に任命すると言っているのだよ。これはたいへん重要な仕事だぞ。今、法の確実な実施と法令の洗練化が非常に重要になっているのだ。君を検事総長に任命するのは、公務上の必要あってのことだ。しっかりやりたまえ！」と言います。その時、トゥムルオチルもツェデンバルと同席していました。あとで、トゥムルオチルは私に「法からの逸脱に厳しく対処し、あらゆるレベルで法律運用への監督を強化することがとても重要になっていたのだ。それで、君を検事総長に任命するというツェデンバルの提案に私は賛成したのだよ」と語ったものでした。

こんなふうに自分がモンゴル（人民共和）国検事総長に任命されても、私自身は気が進みませんでした。当時、人民革命党員は、党の決定や与えられた任務を無条件で遂行することになっていました。そのように教育されていたから、新しく任命された職務につきました。

そして、検事総長を務めていたD.チョイジャムツ氏に会いにモンゴル（人民共和）国最高検察庁へ行きました。チョイジャムツ氏は、自分の仕事の状況と仕事の備え方について、ずいぶんと話しました。話が終わると、チョイジャムツ氏は椅子から立ち上がり、机の引き出しを開けると、大きな印章を出してきて、私に手渡してくれました。そして、

「さあ、これはほかのどんな印章とも違う印章ですよ。検事総長本人だけがこの印章を保管するのです！」と言いました。私は、国家の重大な役職の印璽を恭しく捧げて額にあてると、それを保管庫に戻しました。

私は実際、検事総長という要職に、内心、気後れしていました「こんな要職が務まるのだろうか」と不安でした。いくら法律の専門家だといっても、それまで、そんな重大な役職についた経験は私にはありませんでした。それで、着任してから、最高検察庁の全職員1人ひとりに会い、彼らの仕事について尋ねたり、彼らの意見や感想を聞いたりし、話したことをすべて書き取りました。

当時、国家検察庁には「総管理課」「捜査管理課」「裁判管理課」「特別管理課」という主要管理課が4つあり、そこに約60人の職員がいました。検察機構は、モンゴルの法の運用に対する最高の監督権を執行することによって、モンゴル全土で法の統一的実

施を確実にするために大きな役割を果たしていました。つまり、国は法を実施する諸機関を通じて権限と機能を執行するのですから、国家の権限と機能の執行にとって、すべての段階の検察機関が特別に重要な役割を果たしていたのです。国は自らの機能を確実に果たすために、検察機関に高度な権限を与え、広範囲にわたって活動するためのあらゆる機会を与えていましたが、これは、正しい政策、正しい方針、正しい活動でした。

検察による監督の基本目的と基本方針は、

第1に、モンゴル国の独立と国民の安全を保障し、いかなる犯罪や脅威からも守ること。

第2に、モンゴル国の全市民に憲法およびその他の法律によって与えられた権利と自由を享受させ、あらゆる違反から守ること。

第3に、個人と社会の生活、進歩にとって特別な意義をもち、おかすことのできない神聖な財産権を保障すること。

第4に、人間の生存権および生活権と健康をあらゆる攻撃から守ること。

総じて、国際的に著名な学者たちが社会生活の「3つの要石」としてとくに強調し、定義した、犯すべからざる「人間、自由、財産」の権利を守ることに、検察の活動は向けられていました。

しかし、社会主義社会体制にはいくつかの欠点や限界、欠陥があったことに触れなくてはなりません。このことがわが国の検察の活動に強い影響を与えていた面もあります。

検察は、モンゴル国の法律実施に最高の監督を行い、それらの実施を完全なものにするために、

第1に、モンゴル国のすべての法律を一様に、厳格に実施することを、公的機関やそれ以外の機関およびその責任ある地位にある人物、全国民に等しく要求し、実行させていました。検察機関はその活動において、「モンゴル国の国民はすべて法の前に平等である」、「法的責任も一様に等しく負っている」、という原則に則っていました。

第2に、犯罪者の摘発と捜査、裁判を監督し、関連法令の実施を確実にし、「罪を犯した者は1人たりとも免罪されない、罪を犯していない者は1人たりとも損害を受けない」という原則に厳しく則っていました。

第3に、あらゆる段階の公的機関が出す法的文書（決議、命令、規則、指示など）がモンゴル国憲法とその他のあらゆる法律に完全に整合するという原則に、一貫して則っていました。しかるべき段階の検察機関は、閣僚会議決議、大臣や長官の発した命令、採択された規則、指示、あらゆる段階の執行機関の決議や決定文書を必ず1部受け取り、法律と整合しているかどうかを監督し、違反があれば「反対意見」を書き、その違反を解消するための手立てを講じていました。

それ以外に、検察機関は他の司法機関と協力して犯罪防止活動を幅広く展開していた

ことを言うておく必要があります。

7 法の策定

KY：ツェデンバル氏とは、いつごろから知り合いになったのですか？

SJ：私は先ほど、1939～41年に「党・国家中央学校」で学び、1941～1943年に「幹部学校」で学んだとお話したでしょう。私が幹部学校に在学中、ツェデンバルは私たちの経済概論の授業を受け持っていたのです。その後、1943年に私たちが卒業する時「国家試験委員会」の委員長を務めたのがユムジャーギーン・ツェデンバルでした。その時、ツェデンバルは学生たちの回答を注意深く聞き、試験問題ごとに自分の評価をモンゴル文字で記していました。のちに私は、文書館にあったその試験の資料を調べたことがあるのですが、当時ツェデンバルが1つのまちがいもなしに、モンゴル文字をたいそうみごとに書いていたことがわかりました。彼は国家試験の出題の時、昼休みにわれわれ学生とボール遊びをし、いっしょに写真をとったものです。私が彼を知るようになったのは、まさにその時です。

それ以後、40年余りのあいだ彼の指導のもとでさまざまな仕事をしました。1960年、健康状態の悪化を理由に、私は検事総長の任を辞することを人民革命党書記長のツェデンバルに願い出ました。彼は私の希望を受け入れてこの職務を解き、閣僚会議の法律委員長に任命しました。閣僚会議の法律委員会とは、モンゴル国司法省が果たしてきた機能を基本的に受け継ぎ、実行していた中央行政機関です。司法省が担当していた役割から、主に裁判機構の管轄を国家最高裁判所に移行したのでした。

閣僚会議法律委員会は、国家権力の最高機関が執行する中心的な任務である立法活動の中で、最も重要な構成部分である「法案の起草」という複雑で責任重大な仕事を担当していました。

1960年、私が法律委員長を務めていた当時、モンゴル国の新憲法草案を起草し、全人民で議論し、さらに人民大会議にかけて確定する、責任重く重要な活動が始まりました。党中央委員会のツェデンバル書記長を長とする国家委員会が設置され、新憲法の第1案を作成する役目がわれわれ法律委員会に与えられました。国家委員会から憲法起草の役目を与えられた法律委員会の法律家たちと私は、自国の当時の歴史的状況に科学的根拠にもとづいた正確な評価を加え、国家の将来の展望をできるだけ正しく規定するよう努め、法思想や過去の歴史的経験に関して自分たちの知っていること、頭に浮かぶことを総動員して新憲法草案の最初のバージョンを作成し、ツェデンバル憲法国家委員長に提出しました。

私たちは新憲法の草案を、何よりも世界の社会主義制度が現実存在していることを考慮し、「人類の未来は社会主義・共産主義である」とする大原則に依拠して作成しま

した。新憲法では、わが国で社会主義的生産関係が勝利した歴史的 success を評価し、今後さらにこの関係を優れたものにすること、モンゴル国民の権利と自由の保障と擁護、人民の生活・文化水準の向上、モンゴル国の独立と国民の安全の保障、モンゴル国における社会主義の物質的技術的基盤の建設など、社会や国家組織の中心的重要問題を完全に反映させることが必要でした。

閣僚会議法律委員会の作成したこのような新憲法草案を、憲法起草国家委員会は受け入れましたが、新憲法起草の作業はツェデンバル自らが手がけ、全人民に議論させるための最終バージョンを作成したのです。

ツェデンバル委員長は当時、私を呼び、

「憲法草案の起草はたいへん責任の重い仕事だぞ。私は国家委員会の長として自らこの作業に携わらなくてはならない。君を補佐にする。私は政治局決議を挙げさせ、基本的任務から1ヶ月以上の間解放される。2人でこの建物（政庁のこと）から離れ、バヤンゴルにある私の夏の別荘で作業をする。君は社会主義諸国の法律のほかに、アメリカ、英国、ドイツ、日本などの主要な資本主義諸国の憲法と、法制理論に関してソ連の学者が書いた最近の良書、文献を集め、そこに持って来なさい」と言いました。

こうしてツェデンバル委員長と私は、バヤンゴルにある彼の夏の別荘に38日間、昼も夜も取り組んで憲法草案をほとんど1から新たに起草し、全人民的議論にかけ、意思を問うための最終バージョンを作り上げたのです。

ツェデンバルは私の持っていた実にさまざまな国の憲法および法制に関するソ連の学者の著作を研究して準備を整えたあと、憲法草案を手ずから昼も夜も取り組み、直接ロシア語で書き上げました。私のほうは、彼の要求した資料を探し、彼の書いたものを清書係に配って清書させ、清書係たちの書いたものに誤記がないかを点検し、憲法草案の全章、全条項の語数を数え、別個のリストを作るなどの機械的作業ばかりしていました。ツェデンバルは私を法律の専門家として補佐に置き、法制理論に関するいくつかの問題を相談し、意見交換をしたのです。

ツェデンバルは、若い時分にイルクーツクの財務学院に留学した当時、法制学に関する教養を豊かにし、法律に大きな関心を持つようになった人物だったのです。彼は財務学院を卒業後、書物の買いつけのためにモスクワへ行き、法律関係の書物を集め、モスクワの法律大学に入るための準備をしました。まさにその時、1940年にチョイバルサン元帥がモスクワ駐在のモンゴル大使J.サムボー氏に指示を与え、ツェデンバルをウランバートルに呼び戻したのです。ツェデンバルはしょっちゅう私たちにこの話をしていました。

ツェデンバルが報告や発言、論文その他のあらゆる文書を、内容、言葉遣い、文体の点で、優れた水準で作成することのできる人だったことは、彼のもとで働いていた人は誰でもよく知っています。ツェデンバルほど文書作成能力があり、昼夜の別なく働く根

気のある人は、当時、政庁にはいませんでしたよ。ツェデンバルがほとんど1人で起草した憲法草案は、全人民的議論に付され、さらに人民大会議で議論され、1960年に承認されましたが、当時、世論が賛成していたことを私はよく知っています。

1960年憲法は、わが国で効力を持っていた30年余りのあいだ、モンゴル国の独立と国民の安全のさらなる強化、わが国の経済と文化の活発な発展、人民の物質的生活、文化・生活水準の向上の面で歴史的に重要な役割を果たしたと、私は研究者の立場から考えています。総じてあらゆるものごとはその当時の状況と密接に関連づけてとらえる必要があると、賢人、有識者、理論、歴史的経験は教えています。

1960年憲法の起草、全人民的議論、人民大会議での承認、その後の宣伝に関して、閣僚会議の法律委員会の全メンバーが大いに貢献してくれたことに、私は深く感謝しています。

1960年憲法が承認、公布されたあと、当時施行されていたすべての法律やその他の法的文書を新憲法の思想に整合するように改正する大事業が始まりました。ここでは、何よりも刑法および刑事訴訟法、民法および民事訴訟法、労働法、家族法など、主要な法律を急いで改正することが求められていました。高度な専門性と経験、それに文書作成能力を必要とするこの重要な仕事は、わが法律委員会のツェンド、ホルホイ、アマルフ、ジャムバルドルジといった優れた法律家が決定的な役割を果たしました。

彼らの作成したこのような法律の案は、しかるべき手続きに従って点検され、さらに人民大会議で討議・承認され、長年のあいだ効力を持っていました。

閣僚会議法律委員会のメンバーが行った一大事業は、1921年から1960年までの期間に政府が承認、公布したすべての法的文書（法律、決議、決定、規則、指示など）を体系的に分類して出版するという複雑で粘り強い作業でした。この作業では、政治、社会・経済、文化・教育、科学などあらゆる分野で発せられた法的文書が扱われました。たとえば、農牧業、工業、文化・教育、保健、商業・サービス、輸送、通信、科学、行政などすべての分野で発せられた、効力があり、実施中の文書をそれぞれ体系的に編集したものを本の形で出版しました。

法的文書をこのように体系的に分類し、法令集として出版することは、法令の洗練化、当該分野の業務における法令の正しい運用、厳格な遵守、法律の宣伝、実施に非常に大きな意義を持っていました。この委員会のメンバーは、このたいへんな仕事を昼夜の別なく心血を注いで短期間にやりとげました。

われわれ法律委員会が担当したもう1つの重要な仕事は、他の機関が作成し、人民大会議や政府に提出してきたあらゆる法的文書を点検し、許可を与える仕事でした。

私が法律委員会に所属していた当時のある日、ツェデンバル書記長に呼ばれました。この時もやはり、新たな役目に配置される話だとは思わずに、書記長の執務室に行きました。書記長は、

「話は、君を法律委員長に加えて、閣僚会議官房副長官に任命する件だ。これ以降、君あるいは法律委員会の許可なしでは、政府の会議に対するいかなる決議案の提出も禁じる決定が出されるところだ」と言いました。

これは、政府をはじめ国や行政のあらゆる機関、役職が、法規を厳格に遵守し、その活動を法律の枠内で行うようにするための重要な措置だったのです。

現在でも、法・内務省の許可なしではいかなる法案も国家大会議や政府に提出することが禁じられていますが、これはもっともなことです。しかし実際にそのような仕事をしている様子は見えません。かつての閣僚会議法律委員会のメンバーは知識も専門性が高く、意欲もあり、たいそう勤勉な人たちだったと言っておきたいと思います。

KY：ご自身のプライベートなことをお聞きしてもよろしいでしょうか。ご結婚はいつでしたか？お子さんは何人ですか？

S J：母がわれわれ子どもたちに言い聞かせてくれた教訓の中から、ここでは2つのことを取りあげてお話ししたいと思います。故郷にいたころ、母にはいつも「学のある人になりなさい。お母さんは、お前をウランバートルの学校に行かせますよ」と言い聞かされました。母が息子の私をウランバートルに來させ、学校に入れたことにより、私自身は生涯、学問を追究し、こんにちを迎えました。

「お前はもう1人前よ。男は1人前になったら妻子を持って、一家のあるじになるものよ。あわてて奥さんをもらってはだめ、妻子を養う力がついた時に決めなくてはなりませんよ」と教えられました。私は母の言葉を実行しようと努力しました。ジグメドという父姓を持つイチンホルローとは、党・国家中央学校在学中に知り合い、のちに幹部学校で教師を務めることになった時に結婚しました。私の伴侶J.イチンホルローは党・国家中央学校、幹部学校、のちモンゴル国立大学で学び、歴史とジャーナリズムを専攻しました。妻イチンホルローの父親はガンダンテグチンレン寺の高僧の配膳係を務める僧侶でした。母親はモンゴルの元首ボグド・ハーンすなわちモンゴル仏教の最高指導者ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトの刺繍係でした。名前はノルジマーと言いました。

妻と娘ハndsレンはモンゴル国立大学の法学部で教鞭をとっています。のちに私がすべての役職を解かれ、地方へ追放された時、娘もまた何の理由もなく解雇されました。ハndsレンの長男ジャルガルサイハンもやはりモンゴル国立大学で生物学を専攻して卒業しました。彼はさらに学術研究をするだけの素養のある子です。ハndsレンの娘テグシザヤーはモンゴル国立大学法学部の国際法クラスで学んでいますが、このことを私はたいへんうれしく思っています。私は現在、孫だけでなくひ孫も見ることができてとても幸せです。ひ孫の名前はチュンゲンと言います。子どもと音楽は家の中を温かくし、人の心を和ませ、笑いと喜び、幸せをもたらすと言われるでしょう。これは実生活から生まれた真実の言葉です。

8 テレビ局の開設

I L : ジャランアージュさんは「モンゴルテレビ」を設立し、この重要な機関の礎をきずいた人物だと言われますよね。これについてお話しくださいませんか。

S J : 私は、閣僚会議法律委員会の委員長としての4年間の任期中、専門性に優れ、法律関係の仕事の経験があるS.ツェンド、T.ホルホイなど優秀な同志から少なからぬものを学び、法の起草作業に習熟していました。そんなある日、ツェデンバル書記長の執務室に呼ばれました。私が入ると、彼は、

「話というのは、君を別の職務につける件だ。君の新しい職場はごった煮のようところだぞ。ラジオ、情報、新聞・雑誌といったさまざまな機関がさまざまな方面の仕事をしている。そこでは規律と秩序がしっかり守られていなければならない。君をこの職務につけるのは君が法律家だからなのだよ」と言います。

私は、

「私はジャーナリズムの門外漢ですから、そのような仕事はできないでしょう。書記長、私を今の役職に残してください！」とお願いしました。それでも、彼は私の希望を受け入れてくれませんでした。こうして、1964年4月11日、党中央委員会政治局会議で議題とされ、「情報・ラジオ管理庁」の長官に任命されました。当時、党員は党から与えられた任務を無条件で遂行しなければならなかったもので、新しい仕事に早急に着任し、しっかり働くことだけを考えなければならなくなりました。私が任じられた「情報・ラジオ管理庁」は、あらゆる面の教養と能力があり、主体的に仕事のできる人材をそろえた、非常に重要な業務を担当する機関でした。この機関には、わが国の優秀なジャーナリスト、政治研究者、コメンテーター、国内一流の翻訳家や、英語、ロシア語、漢語、ドイツ語、フランス語などさまざまな言語に精通した人たちが勤めていました。私としては、国家の業務を行う基本原則をしっかりと適用し、責任感を高め、規律と秩序をしっかりと守ることに留意する必要がありました。

モンゴルには「金のそばにあった真鍮は黄色になる」ということわざがあるでしょう。私が新しく着任した職場は、業務や専門に長けた人たちが大勢いましたから、彼らから多くを学びましたし、メディアについて多くのアイデアを持つようになりました。私にとって、この機関に長年勤める間に自分で追究し、少なからぬ困難を克服し、ほかの人たちと心と力を合わせて成しとげた大事業が、まさに「モンゴルテレビ」の設立とその活動を軌道に乗せた仕事だと言えます。しかし、私には自画自賛したり、地位を追い求めたりするような悪い性分、あるいはそんな「病気」はありませんよ！

強力な近代的メディアであり、人間社会における文化発展の驚異的成果の1つであるテレビをモンゴルに開設する問題が、通信省や情報・ラジオ管理庁のレベルで議論されるようになったのは1960年代前半のことです。そして国家計画委員会や政府レベル

で何度も議論され、テレビ開設については基本的にすべての段階で承認されてはいたのですが、どのくらいの規模で、どの程度の費用で開設するかについては合意に至らないまま時間が過ぎていきました。計画委員会や財務省などの機関は、テレビ開設はできるだけ出費を低く抑え小規模にすることを提案し、強硬に主張しており、それが主要な障害となっていたのです。この問題はこのように予算や資金面の影響を受けたためにかなりの時間をとられていたので、私自身が直接ツェデンバル書記長に話をし、この問題を説明することにしました。そしてある時、党中央委員会政治局会議が開催された際に承認をとることができました。もともと、その会議で予定していた議題には、テレビの問題は入っていませんでしたし、私も呼ばれていなかったのですよ。ツェデンバル書記長と会うための機会はほかにありませんでした。ずいぶんとたいへんなことになりました。私は会議に出席し、モンゴルにおけるテレビ開設問題を速やかに決定してもらえようツェデンバル書記長に要望し、具体的な提案をしました。政治局員たちは私の発言に注意深く耳を傾け、さまざまな質問をしました。このような熱心な話の中にツェデンバル書記長も加わり、「どんな規模の、どんな性能のテレビを開設しようというのかね？」などと数多くの質問をしました。この話し合いの最後に書記長が、

「さて、同志諸君。諸君がどのようなテレビを開設しようと思っているのか、多少なりともわかった。わが国のテレビがどのようなものになるかは、直接諸君の力にかかっている。〔ソ連・ブリヤートの〕ウランウデテレビの仕事ぶりを諸君は知っているだろう。わが国のテレビはあれを上回るものにならねばならない！」と発言したことによって、われわれの「モンゴルテレビ」開設事業が決定されたのです。

「モンゴルテレビ」開設問題は、このように、決定までにたいへん時間がかかった末、「ソ連第2建設トラスト」が相当な短期間のうちに高品質のものを建設し、モンゴル側に引き渡してくれたのでした。テレビ局を開設することになったので、いかにテレビ放送を行うかという問題は、私の指揮下の機関が直接責任を負う主要な仕事にほかならないため、その時には、さまざまな困難に直面し、それらを克服しなければならなくなりました。

最も困難な問題は、テレビの専門的エンジニアや技術者、テレビ番組の制作と放映の知識や経験のあるジャーナリスト、演出家、カメラマン、アナウンサーなど多様で細分化された専門的役割にふさわしい人材をわが国で早急に確保し、養成することでした。

これに関して援助をしてくれるよう、ソ連のラジオ・テレビ国家委員会に要請しました。そして私自身、ソ連ラジオ・テレビ国家委員会のY.G.ラプーチン委員長に会いにモスクワを訪れ、事情を説明し、具体的要望を提示しましたが、ラプーチン氏はそれを受け入れて協定を結び、ラプーチン氏と私が署名したことによって問題が解決しました。

モンゴルでのテレビ放送は1967年9月27日に開始され、それによってモンゴルの家

庭に重要な近代文化が入ってきたのでした。モンゴルテレビの礎を築き、その最初期の放送を制作・放送した先駆者たちが、知恵と能力を動員し、高度な積極性と努力、善意を発揮したおかげで、モンゴルテレビの開設事業は成功しました。そして、わが国最初の放送をモンゴルの視聴者たちは熱烈に、満足をもって受け止めたのです。このことはわが国最初のテレビスタッフを励ます強力な支えとなりました。

モンゴルテレビのさらなる強化、拡大、放送の質と効果の向上の面で多くの重要な方策を講じましたが、その1つは、芸術に関心があり、将来的に成長の見込みのある多くの青年を試験で選抜し、ジャーナリスト、演出家、カメラマン、エンジニア、技術の高度な専門性を習得させるために、毎年、しかるべき専門の学校に通わせたことです。

そういった青年たちが高度な専門を身につけて学校を卒業してくるにつれ、モンゴルテレビは専門要員の層が厚くなり、放送範囲を拡大し、質と効果の向上を続けてきました。

9 政治家として

S J：私は、1971年11月から1983年6月までの期間、党中央委員会政治局員、書記、モンゴル人民共和国人民大会議幹部会副議長を務めました。

党と国の最高指導部の一員として活動していた時期に私が責任を負っていた基本的問題は、

- 党活動
 - 大規模建築
 - 法律、監督、政府・非政府の各機関
 - ウランバートル市の問題
- などです。

先ほど述べた具体的な諸問題の中で、あらゆる活動の中心は、党中央委員会政治局、中央委員会書記会議に集中していました。それは、党や国が決定する政治、社会、経済、文化機関に関わるすべての基本問題、簡単に言えば、党や国の内外政策と活動の重要問題を、集中的に決定するのがここだったからです。ここ以外で決定される問題は1つ也没有でした。

党と国の最高指導部のメンバーの活動は、個人責任と共同責任の原則に則って行われていたと言えます。

私自身が直接責任を負っていたいくつかの主な仕事について若干お話ししましょう。

人民革命党の内外政策とあらゆる活動は、1つの大きな歴史です。20世紀、モンゴルを発展させ、近代的なモンゴル国を作った歴史ですよ。ここでその大きな歴史を語りつくすのは無理です。私がこの仕事に責任を負っていた当時の活動の中から、いくつか

のことがただけを簡単にお話ししたいと思います。当時の党の活動はたいへん広範囲にわたるものでしたから、私が担当していたのは「党の組織問題」だけでした。

党中央委員会では私の指導のもと、この活動に責任を負う「党活動課」がありました。この課は、18県とウランバートル、ダルハン、エルデネト各市の党委員会の党組織活動とモンゴル革命青年同盟やピオネールの組織、モンゴル労働者組合、女性団体の問題を基本的に担当していました。この課の目的は、組織化を指導する党機関の役割と責任の向上を常にはかることでした。個々の県や市を担当するオルグ、大衆団体の中央機関を担当する指導者、「党防衛」、統計を担当する部署がありました。党大会、党中央委員会総会、政治局の決定や方針にもとづいて党の各級機関を強化し、それらの活動を組織し、点検して指示や助言を与えるといった重要な活動を、この「党活動課」が担当していたわけです。私の時代、この課の責任者だったG.アディヤーとTs.バルハージャブはのちに党中央委員会書記という要職に昇進しました。

別の面で、党活動課は党の指導的幹部要員の重要な供給源になっていました。たとえば、党活動課の県や市担当オルグは、県や市の党委員会の第1書記や分会担当書記に任命されていたのです。

また、課の構成員の一部は、大臣や長官、県・市の首長などの役職に任命されたものです。この課の構成員は、政治や個別の分野での高度な専門性を持ち、高い教養と倫理、実務の点で信頼に値する優れた人材でした。

党活動課の活動の基本方針は、あらゆる段階の党機関に人材を補充し、あらゆる活動を活発化させること、それぞれの段階あるいは分野における組織化を担う党機関の役割と責任の向上を常にはかることでした。そのために「党初級機関全国会議」が首都ウランバートルで、「党初級機関地域別会議」が各地で、定期的に開かれていましたが、これはあらゆる段階の党機関の役割と責任を向上させ、それらを全面的に強化するための強力な推進力となっていました。このように、当時の政策やその時々々の活動について回想していると、ほとんど終わりのない話になってしまうでしょう。つまり、国の経済のあらゆる分野、文化・教育の発展、国民の生活と文化水準の向上に関して党が提案したさまざまな目標を達成することに、あらゆる段階の党機関の活動が向けられていたのでした。

私がここで回想としてとくに言っておきたい主な問題は、党の各細胞（共産党の支部を意味する用語）から中央委員会までのあらゆる段階の党機関は、高度な専門性と教養、経験、倫理と実務をしっかりと兼ね備えた、あるいは兼ね備えつつある人材によって強化されたり、強化されつつあったり、ということです。たとえば、各県各市の党委員会の書記はほとんど全員、国内の党大学、国外ではソ連共産党中央委員会付属党大学か社会科学アカデミーの卒業生であり、中にはさらに個別の高度な専門性を身につけた者もいました。まとめて言えば、人民革命党は一貫して「しっかりと養成された人材ほど価

値あるものはない」という主義に立っていたのです。

こういった時代に、わが国では教育、文化、科学、保健に関して党や政府が提示した目標が無事達成されました。

学齢期のすべての子どもが普通教育の学校に通って中等教育を身につけ、さらに国内外の大学や個別の専門学校に進学して各種の専門や全面的な教養を身につけた人材となり、経済・文化建設のすべての分野で活動し、発展させました。

わが国の学齢に達した国民が全員、文字を読めるようになり、さまざまな伝染病から完全に解放されて健康になったことは、党・政府の正しい政策と実施した方策のすばらしい成果でした。

モンゴルで初めて科学アカデミーとそれに属するさまざまな研究所が設立され、科学が順調に発展し、国家の発展に重要な役割を果たし始めました。

とりわけ、教育が先進的分野として発展した実例は、普通教育学校が全県全市の中心地と全郡に設置され、モンゴル国立大学、その後そこから分かれた師範大学、農牧業大学、医科大学などの大学が設立されたことです。また、特別専門中学が数多く設立され、わが国の何千人もの青少年男女がそこで学び、さらに各種の専門要員が誕生したことは、モンゴル人民の国民的誇りとなっていました。

同様に、芸術や文学が開いたことは、モンゴル人民の文化、教育、知的財産の発展に大きな役割を果たすことになりました。

このように、政権を担当する人民革命党が国家の経済・文化の発展や人民大衆の生活・文化水準の向上に関して提示したさまざまな目標は順調に達成されました。その結果、人民大衆は衣食や物品、金銭に事欠く心配がほぼなくなり、精神的に安定し、怖れるものもなく、安全な環境で安心して生活するようになってきました。

私ジャランアールジャブが党中央委員会の党活動担当書記を務めていた当時、党は一流の人材で隊列を強化し、党員数は7万人余りになっていました。モンゴル国の独立と国民の安全を保障し、国家の経済・文化を機能させ、人民大衆の生活向上をはかることについて、人民革命党綱領に規定された目標を実現するための献身的活動を組織し、常に機敏な指導を与えることが党政政治局の主な役割であり、責任を持つべき主要な活動となっていました。

政治局はこの任務を遂行するために、党や国の内外政策と情勢、国の状況と進歩に関連するあらゆる基本問題について具体的な諸決定を出し、それらの実現のための活動を組織していました。私ジャランアールジャブがお話しているこれらのことは、不完全ながら私がそれなりに知っている1940～1980年代の政治局にまつわる話です。

政治局の構成員は正局員が7人、准局員2人、合計9人でした。最後の20年あまりの政治局員には、任期はさまざまですが、ツェデンバル、J.バトムフ、D.モロムジャムツ、D.マイダル、T.ラグチャー、S.ロブサンラブタン、B.アルタンゲレル、S.ゴム

ボジャブ、B.デジド、D.ソドノム、そしてジャランアージャブがいました。総じて、モンゴル人民革命党、モンゴル政府、国家、国民を指導したり組織したりするあらゆる活動が政治局に集中していたのです。

ここで、人民革命党の果たしていた役割と活動、威信と直接の関係がある原則的重要問題の1つに触れる必要があるでしょう。「モンゴル人民革命党はわが国の社会を指導し、鼓舞して組織する主要勢力である」という規定が憲法にありました。このように党の法的位置づけがモンゴル憲法で保障されていました。ですから人民革命党は政府と一体化した、国家権力を握ることが法律で保障された党だったと見なすべきです。これはわが国だけでなく、世界社会主義体制が存在した時代に、その陣営に含まれていたすべての国々で適用されていた原則です。

人民革命党中央委員会政治局の構成員には、中央委員会書記以外にも人民大会議幹部会議長（国家元首に相当）、閣僚会議議長（首相に相当）、その両者の次官が常に参加していました。ですから、人民革命党大会と中央委員会総会の行われていない期間には、法律に則って中央委員会政治局が人民革命党と国の中央最高権力機関になっていました。党中央委員会政治局は単に政策なるものを規定したり、無駄話をしたり、言い争いをしたり、あらゆる問題を政治的に利用する場所ではなく、国家を真に、実務的に指導し、恒常的に広範囲にわたって活動する、献身的活動が行われる場所でした。たとえば、国家予算、国民経済・文化発展計画は基本的に政治局が作成し、それを政治局会議で討議し、その上で承認を得るために、国家の最高レベルのしかるべき会議にかけられていました。

私が先ほど述べたことを裏づけるためにもう1点、党中央委員会政治局員で書記だったモロムジャムツが経済面の中央諸機関と工業問題を、ジャグワラルが農牧業問題を、ゴムボジャブが商業と貿易、対外経済関係の問題を、私ジャランアージャブが党・国家行政、大衆、法管理の問題のほか、大規模建設事業をそれぞれ担当していたことを述べれば充分でしょう。

党中央委員会政治局は、党の政策と活動をつかさどる中心として党と国家に対して負った責任重大な役目をしっかり果たし、活動を通じてモンゴル人民革命党の威信を確固としたものにしていました。このことを、私ジャランアージャブは10年余り党中央委員会で党活動担当書記を務め、中央委員に選出されて20年以上務めた者として、証言することができます。

また、党は国家と人民大衆の利益を一貫して守り、人民を重んじ、彼らを騙したことは1度もない、そんな政治勢力であったと、60何年かをその隊列にいた者として私は言うことができます。

党中央委員会政治局員の中で、何らかの犯罪や違反、たとえば、国有財産の横領、浪費、腐敗（贈収賄）への関与、詐欺といった類の刑事犯罪に関わったり、倫理的問題を

起こしたりした人間は1人もいなかったことをここでとくに指摘しておきましょう。

私自身は党の活動と威信の問題に関連して、このことを述べるにあたり、党の政策と活動に表れていたいくつかの誤り、欠点、逸脱を否定したり、隠蔽したりするつもりはないことを強調したいと思います。

党は当時、あらゆる問題を一党の思想と結びつけて考えていたので、問題によっては一面的な態度をとったり、大きな誤りを犯したこともあります。たとえば、「知識人の迷妄」、「反党グループ」と言われる問題や、L.ツェンド、D.トゥムルオチルら幹部に関わりのあるいくつかの問題では大きな誤りを犯しており、これを決して繰り返してはなりません。過去の歴史になったとはいえ、1つの歴史的教訓としてここに述べておきたいと思います。

指導と組織という人民革命党の主要任務を担い、それを実行する中心機関となっていた政治局の構成員は、しばしば、つまりあまり時間をおかずに入れ替えを行い、しっかりと養成された若い人材を補充する必要がありました。トゥムルオチルは党中央委員会政治局員・書記在任中、党中央委員会のある定期総会の冒頭で立ち上がり、発言をしたのですが、その時、知識や教養、手法の点で遅れているとして、当時政治局員だったダムバ、スレンジャブ、サムダン、バルガン、ラムチンらを批判しました。党中央委員会総会のメンバーは彼を支持し、今述べた顔ぶれを1度に改めました。党中央委員会政治局の構成員をこのように刷新することは不可欠だったのですが、政治局の活動を指導していたツェデンバルはこのような作業を行いませんでした。これは彼の重大な誤りの1つだったと言えるでしょう。私の知る限りでは、トゥムルオチル以外に、国家や人民の利益のために政治局や国の最高指導部に対して誠実な批判をした人物はほとんどいないのではないのでしょうか。

トゥムルオチルは当時、ツェデンバルを支持していましたし、その誤りを率直に批判してもしました。トゥムルオチルについて誤った決定を出し、彼にダメージを与えたことを、ツェデンバルはのちに認め、「私はトゥムルオチルを登用しすぎた。トゥムルオチルの仕事ぶりは私よりも優れている。いかんせん性格が…」と話したものでした。

党に関連して私がここで取り上げているいくつかの誤りは、党の犯した誤りと見なすことができると思われますが、主には、当時、党の中央機関を指導していたツェデンバルと直接関係があり、多くは彼が原因だったと、歴史的教訓として誠実に言わなくてはならないと思います。

法律の見地から言えば、あらゆる問題とあらゆることがらは、それを行った真の主体と関連づけて見るべきであり、同様に、党の最高機関あるいはツェデンバルの犯した誤りや罪を、党や何千人もの一般党员にかぶせようとしたり、彼らをとがめたりののしったりしては絶対になりません。それでは法律にも倫理にも反します。

10 ツェデンバルの思い出

KY：ツェデンバル人民革命党書記長と長年の知り合いだった人物として、彼のもとで働いた時代の思い出を少しでもお話いただけますか。

SJ：党中央委員会の党活動担当書記在任中の仕事については、先ほど簡単にお話しました。1984年8月に開催された第8回党中央委員会総会は党中央委員会のツェデンバル書記長の問題に関して正しい決定を下すことができなかったと私は思っています。ですから、党書記長だったツェデンバルについてお話するのは少しだけにしたほうがいいと思います。40年余り人民革命党とモンゴルの国家・政府の最高指導者だったツェデンバルの生涯と活動、彼の成し遂げた巨大な事業、打ちたた功績についてすべてを語ることは不可能ですし、その必要もありません。

私自身がツェデンバルと初めて知り合ったのは1942年のことで、幹部学校在学中には「経済学概論」を教わり、彼は国家試験の出題者でした。1958年以降、彼の直接の指導のもと、国と政府の責任重大な仕事に何年も携わりました。1972～1984年には、党・国家の最高指導部の構成員として、やはり彼の指導のもとで仕事をした人間として、ツェデンバルの人となりについての印象をお話することはできると思います。

ツェデンバルは、モンゴルの発展と繁栄、独立のため、人民大衆の根本的利益のため、自らの持てる能力と知恵を尽くして取り組む名高い政治指導者であり、リーダーであつたと私は太鼓判を押すことができます。

ツェデンバルは教養があり、文化的で、幅広い知識を備え、仕事への意欲と能力があり、極めて勤勉で、政治的経験が豊かで、正直で、大衆から尊敬される人物でした。

ツェデンバルはわが国の経済・文化建設のあらゆる分野の創設、活発な発展、高度な成功への到達、人民大衆の生活・文化水準の向上のための活動に大きな役割を果たしたのです。

ツェデンバルの意見と提唱によってわが国に経済・文化のさまざまな部門が新たに創設され、発展しました。「未開地開墾運動」の展開による農耕の新部門の成立と、いくつもの新しい工業コンビナートの建設において、彼のイニシアチブと尽力、全面的支持は多大なものでした。

ツェデンバルはわが国での各種の専門要員養成事業に、まさに革命を行った人物です。彼の提唱により人民革命党中央委員会付属党大学やモンゴル国立大学が設立されたことは、国家の発展にとって評価してもしつくせないほどの意義がありました。

ツェデンバルは人のふんどしで相撲をとることをせず、自らの頭で考える能力の高い人物でした。彼は人民革命党綱領や憲法など党・国家の主要な文書の仕上げを自ら直接担当し、手ずから行っていました。党大会や総会、その他の会議で行う報告や演説を、彼が自分の力で書いて作成していたと私は証言することができます。

ツェデンバルはモンゴルの独立と国民の安全の保障に関して、たいへん多くのことを成し遂げた真の愛国者でした。彼のことを「ロシア最良で、ロシアの利益のために働いていた」と言う人がいます。これは何の証拠もなく、根拠の無いたわごとです。

ツェデンバルこそ人民の真の指導者でした。彼は地方を訪問し、地域の活動や状況を常に把握し、人びとの声を聞き、要望や請願、不満を受けつけていましたし、それらを迅速に解決し、困窮した人びとにはできる限り支援するよう努め、人にたいへん配慮し、人道的で善意を持った人物でした。住宅や金銭的援助を望んだり、あるいは学校への入学への口添えを頼んだり、有罪の判決を受けた子どもや親類を釈放して欲しいなどと泣きつくために会いに来た人たちに助力したり、住宅を与えたり、金銭的援助をしたり、子どもを釈放してやったりするための手を打つ方策に関し、党中央委員会書記たちや私に常に指示を与えたり、あるいは自ら直接手を打って力になってやったものです。

ツェデンバルは「知識人の迷妄」、「反党グループ」なるものや、ツェンド、トゥムルオチルらのような幹部の問題において誤りと逸脱を犯し、党と国・政府の指導部での自分の位置に取って代わる見込みの高い、しっかりと教育され、実務経験の豊富な一部の人間を、何かしら理由をつけて非難し、解任や地方への追放を行っていました。

ツェデンバルは党書記長在任中の末期、妻であるアナスタシア・イワノブナ・フィラトワが彼の仕事に直に介入してかき回していたせいで、一部の指導要員に関して誤った決定を下し、無実の人びとにダメージを与えるということが起きていました。

ツェデンバルに告げ口をして彼の頭を混乱させ、自分の評判や得になるように企てる小数のろくでなしがいました。連中の悪意に満ちた行いのせいで、ツェデンバルは党および国の最高指導部で共に活動していた同志に猜疑心を持つようになり、お互いに不信感を持つようになったのです。

ツェデンバルは1970年代末からその役職にふさわしくなく、仕事の責任能力を失い、年を重ねたことから健康状態が芳しくなくなり、その後ひどく悪くなりました。彼は長年、少しも自分の身体をいとわずに休みなく日夜働き続けたので、人間の身体にあるすべての力を使い果たしたのだと私は思っています。この状態を根拠として、彼を党および国・政府の最高ポストから解任したことは正しい対応でした。

ツェデンバルに対しては、亡くなるまで心安らかにはからい、介護すべきだったのに、当時のわが国の政権担当者たちは事実上彼をごみのように捨てたのです。何の根拠もなく彼をさまざまにののしったり悪口を言ったりしたことは絶対に正当化してはなりません。

ツェデンバルはモスクワでの「自宅軟禁」の中で、心を痛め、寂しく1つの部屋で孤独に暮らし、生涯を終えました。なにも彼をそんな状態に置くことはなかったのです。

ツェデンバルが亡くなったあと、彼の妻子や親類が祖国であるモンゴルに遺体を持ち帰って埋葬する際、当時わが国で党と政府の最高指導部にいた連中は何の敬意をも示さ

ず、ほんの少しも注意を向けることなくやりすごしました。これは、あまりにも冷淡で非人間的でした。こういった連中がかつてツェデンバル時代、ツェデンバルの支持を受けて党や政府の高い地位についた連中であり、彼のことをよく知る人たちだったことは実に残念なことです。

ツェデンバルがモンゴル政府から与えられた軍の最高の称号である「モンゴル人民共和国元帥」そして「モンゴル人民共和国国家英雄」、「モンゴル人民共和国労働英雄」といった称号を無効とし、彼の業績を評価して与えられた勲章類を没収し、党籍を剥奪したことは、極めて誤った行為でした。このような行為を行った連中は、法律に則って責任を追及する必要があります。

ツェデンバルがモスクワで暮らしていた当時、彼が合法的にウランバートルに所有していた住宅や私有物を不法に攻撃し、浪費し、なくしてしまった野蛮な行為を、法律に則って調査すべきです。

ツェデンバルに誤りや弱点があったのを否定することはできませんが、彼の偉大な業績と功績を歴史のページから消し去ることは絶対に誰にもできません。歴史は歴史として残るものなのです。

ツェデンバルの同僚であった政治局員を非難し処罰するために、いわゆる「取り巻き」の「でっちあげ」が仕立て上げられようとしたことが、法律の目がありましたので、彼らを処罰することはできませんでした。

ツェデンバルに責任能力や正しい判断力がなくなり、1970年代末には年老いた人間として健康状態が急速に悪くなっていたことがわかりながら、当時、彼にしかるべき敬意を払いつつ書記長の座から解任しなかったのは、党中央委員会政治局の重大な誤りでした。

ツェデンバルの功績といくつかの誤りについて、私の個人的感想を手短かにお話すれば、以上ようになります。

11 冤罪

I L : ご自身はなぜ「反党グループ」なるものに連座させられたのですか？本当にそのようなグループはあったのですか？

S J : ツェデンバルと私の仕事上の関係は良好で、私は信頼され、仕事上の提案や批判的発言も尊重してもらっていました。人民大会議議長のジャムスランギーン・サムボー氏という人がいたでしょう。彼は生来の聡明さのある、実にすばらしいモンゴル人でしたよ。サムボー氏が亡くなったあと、ツェデンバルは閣僚会議議長の役職に私を任命するつもりだと言いました。私は彼のこの提案を強く断りましたが、彼は私にたいへんな圧力を加えたのです。「閣僚会議の議長は経済の専門家で知識と教養が豊かな、政

治的にも実生活でも経験豊富な人物であるべきだ」と私は思っています。ツェデンバルと私はこの問題について2、3日話し合い、ときには深夜3時、4時にまでなりました。政治局会議でも、私がこの提案を辞退していることを話しました。そしてツェデンバル自身も、自分の提案を撤回しました。実のところ、ツェデンバルこそ、私を社会のくずとして捨て去った人物なのです。

私は1983年の夏、モンゴル人民革命党代表団の団長として、ソ連共産党の招待によりソ連を訪問しました。われわれ代表団は温かく迎えられました。旅程はすばらしく企画されており、成果は上々でした。そしてウランバートルに戻りました。年齢は60歳になっていました。ウランバートルに戻った翌日、すぐにツェデンバル書記長を訪ねました。すると彼は冷たい態度で、

「君はどこへ行ってきたのかね？」と尋ねます。私はたいへん驚きました。そして、

「私は、ソ連共産党の招待によりソ連を訪問してきました。このことは『ウネン』紙でずっと報道していましたよ。お読みになったはずでしょう！」と言いました。ところが彼は何も言わず、黙ったままです。私たち2人のあいだにはこれといった会話はありませんでした。私は「何かが起きている」と内心思いました。それからツェデンバルの執務室を出ました。すると、党中央委員会総会をまもなく開催するための準備が進められているという知らせがありました。本来、党の総会の日程や議題を扱い、決定するのは私だったのです。そしてまもなくツェデンバル書記長の執務室に呼ばれました。どんな用件なのか見当はついていました。そして彼の執務室に入りました。彼はこの前のように、あいかわらずたいそう冷淡でした。彼は私に椅子をすすめもしませんでした。そして、

「話は、君を引退させる件だ。政治局会議で取り上げる。この問題を総会にかける」とよそよそしく言います。

私は、

「引退してもかまいません。そもそも、私はあなたに『引退する、研究活動をする』と言っていたではないですか。ですが、今、引退させようとする理由をお聞きしたいものです。私は政治に携わっている法律家ですから」と言いました。ところがツェデンバル書記長は何も言いません。

私は、

「明日開催される総会で発言します」と言いました。

ところが彼は、「発言の必要はない！黙って見ている！ただ感謝の言葉を述べるだけでいい！」と言います。実際、私は総会で感謝の言葉以外は述べませんでした。本当は言いたいことはたくさんあったのですよ。「あれこれしゃべって党の団結を乱す必要はない」と思ったのです。そして「科学アカデミーへ行き、研究活動をするぞ！」というつもりで退任しました。数日後、ツェデンバルに会いに行くと、彼の秘書が中に入れて

くれません。私は毎日彼の部屋に自由に出入りしていた人間ですよ。それなのにどんなに頼んでも入れてくれません。そして何事もなく数ヶ月が過ぎました。そうしていたところ、12月に党中央委員会の党統制委員会に呼ばれました。私は行きました。党統制委員会の会議が開かれました。その会議で、党統制委員長のB.デジドという人物が、

「1964年に起きた『反党グループ』の首謀者はお前だった。これは証拠によって証明されたことだ。われわれは党中央委員会からのお前の追放を党の総会にかけろ！」と言うのです。こんな中傷を受けたのは初めてのことでしたので、最初のうち、たいへんなショックを受けました。しかし自制して、1964年の「反党グループ」なるものとは何の関係もないと言いました。その時、「中傷には何を言っても無駄」というモンゴルの格言が頭に浮かんできました。1964年12月に開催された第6回党中央委員会総会では、Ts.ローホーズ、B.ニヤムボー、B.ソルマージュが「わが国の発展の速度はたいへん遅い。負債も多額である。一部の地域を他国に譲渡した。贈収賄が行われている。ツェデンバルが守っているのはロシアの利益だ。国内の知識人を冷遇している」と批判したのです。彼らは「反党グループ」と名づけられた上、地方へ流されました。この追放はたいへん長い期間続き、彼らはほとんど30年後になってやっと名誉回復されたのですよ。私は彼らと何のかかわりもない人間ですよ。その日、私は党を追放され、党員証は没収されました。それから2ヵ月後、警察長官が私を呼びつけ、

「あなたをザブハン県のアルダルハーン郡に送る決定が出ましたので、早急にそちらへ行かねばなりません」と通告しました。それから数日後、私の住んでいた国有住宅は不法に没収され、わが家の家財道具は、警察官が自動車に積んでザブハン県まで届けるために持って行ってしまいました。その2日後、私は公的手続きに従って警察官に飛行機でザブハン県の中心地まで行かされ、そこでは警察の少佐「モンゴルの警察には軍隊と同様の階級がある」に迎えられ、アルダルハーン郡に送り届けられました。娘のハンスレンは当時、モンゴル国立大学の教師でした。娘もやはり、いきなり解雇されました。このように、私はすべての役職を解かれ、まるで覚えのない罪を着せられ、党を追放され、地方へ放擲されたのでした。

こういったことはすべてツェデンバルの妻アナスタシア・イワノブナ・フィラトワと党統制委員長ボギーン・デジドの2人がしたことです。ツェデンバルの妻で「子ども基金」の理事長フィラトワと私の関係は、いくつかの問題がもとで悪化し、しまいには非常に深刻な状態になっていました。フィラトワはしてはならない数多くのことを私に要求したのですが、私はその要求を1つも受け入れず、むしろ自分の立場を表明して容認しない旨告げていたのです。たとえば、担当の職務をしっかりと遂行し、世間でも評判の高い何人もの人物を何の根拠もなく解任するよう、何度も何度も要求し、たいへんな圧力をかけてきました。最後にフィラトワは、私の執務室にいきなり入って来て、身についた物腰でののしり、わめいた末に、「今後、私はあんたのことを党中央委員会書記

とは思わない。これからはデジドが全部決める！」と言って出て行きました。1984年、フィラトワはモスクワに住んでいた時、ある責任ある役職にある人に「私はウランバートルに行ってジャランアージュブを黒い家に入れてやる！」と言っていたそうです。「黒い家」というのは、監獄のことですよ。フィラトワは私を刑務所送りにすることを心待ちにしていました。その願いが実現しはじめる条件が整ったのです。

このようにフィラトワと私の関係が非常に深刻な交戦状態に陥ったことは、デジドにとっては実に好都合でした。ボギーン・デジドは内務大臣を務めたことのある人物です。第17回党大会の開催中、ツェデンバルは私に、ボギーン・デジド内務大臣を党統制委員長に任命する心づもりであると話しました。私はこの考えを支持しませんでした。「デジドは諜報員でしょう。党中央委員会政治局に諜報員が入ってくるといえることですか、つまりベリヤということですよ！」私は彼にそう言いました。I.ベリヤとは、スターリン時代、ソ連国家保安委員会の委員長を務めた人物です。この人物はスターリンと手を組んで、数多くの無実の人を粛清し、死刑にした最も恐るべき人物ですよ。デジドはこうして党中央委員会の党統制委員長に任命され、政治局に入ってきたのです。彼についての私の発言は、ツェデンバルを通じてデジドは聞いていたはずですよ。彼が私に対して好意的でなかったのもっともです。フィラトワとデジドはこうしてお互いの目的を果たすために徹底的に手を組み、互いを利用するようになったのです。

手始めに、私ジャランアージュブを党中央委員会政治局員、書記、人民大会議幹部会副議長（副大統領に相当）の役職から解任し、次に党中央委員を解任することで、ツェデンバルの了承を得ていました。党書記長であるツェデンバルは彼らの言いなりに、そのような決定を下したのです。それから党中央委員会政治局と総会でそれぞれ議題にし、決定させました。こうして党統制委員会の決定が出され、私から党籍を剥奪し、地方へと追放したわけです。

1990年、「ジャランアージュブの反党活動について」という題名の党中央委員会決議が無効となり、私は1990年7月31日に「名誉回復証明書」を手渡されました。私は追放先からウランバートルに戻ったあと、する仕事もなく、生活が困窮し、1日じゅう街を歩いて日々を過ごすようになっていたのですが、そんな時、わが国の著名な法律家にして博士、教授、モンゴル憲法裁判所の最初の所長であるJ.ソブドが、自身が責任者を務める国家・法研究所に私を研究員として採用してくれました。このことを、私はたいへん感謝しています。その時は、私サンビリーン・ジャランアージュブの人生が、再び新しく始まりつつあるように感じていました。私はこうして自分の人生に起きた苦しい時代を克服し、教師と研究の仕事に復帰したのです。長年教鞭をとったこと、ささやかな研究の成果を高く評価して、モンゴル国大統領令が出され、「モンゴル国功労法律家」という大きな賞をいただいたことに、私は深い感謝を表明いたします。

KY：すばらしいお話をありがとうございました。